女鑑

明治[illegible]七年[illegible]月五日發行

第六十四號

東京國光社

女鑑第六十四號目次

加賀の千代



女鑑

進取と退守と

女子は、素、柔順と、靜淑とを以て、其の德を養ふ要道とすべきは、固より言ふべくもあらず。然るに、此の世の中の事物は、日々轉旋し、時々移變することゝ、猶、流水の如くにして、須臾も靜止することなし。されば、世の務に處し、其の機を失はず、其の道を盡くさんとするものは、自、亦、唯、退守の主義のみを取りて、變通の理に暗きが如きことあるべからざるは、自然の理勢によりて生ずる責務なりと謂ふべし。

此の責務にして、果して、其の身に係累せば、如何にしてか、之が所置に於い

て、其の心神を盡くさゞるを得ん。彼の進取の主義とは、即、之に對する方針を謂ふなり。而して、此の方針をして、其の進行を誤らざらしむるは、則、退守の精神の堅固なるによるものなり。

されば、進取も、退守も、其の極に至りては、其の歸する所を一にせるものにあらざるはなし。然るを、世に進むことを知りて、守ることを知らず、唯、知らざるのみならず、知りて、而して爲ざるものありて、漫に、進取をのみ唱道するものあるは、是、亦、誤の甚しきものにあらずや。

さて、婦女子の取るべき進取の主義とは、如何なるものを云ふべきか。蓋、婦人の爲すべき所は、閨内の事のみ、然れども、今日の世、既に、此の如し。されば、之に對しては、自、事ごとに、其の意を致さゞるべからず、縱、外事は、男子に

委するとするも、其の自身、亦、其の覺悟なかるべからざるなり。但、擅に、之を處置せざるべきのみ。之を左右せざるべきのみ。

退守の精神とは、何ぞ。即、自守の精神なり。已を修むる心なり。蓋、其の自身自己を修めて、其の心を持すること、愈堅くして、萬難千苦にも、敢て、屈撓することなきに至らずば、自守の至れるものと謂ふべからず。而して、又、退守の至らざるものなり。苟、退守の精神にして堅固ならずば、如何ぞ、進取を期することを得ん。進取、既に期することを得ずば、人生の事、今日の務に於いて、將、何を以てか、之に當らんとするか。

婦人の務は、家にあり。育兒にあり。而して、其の親と、夫とに事へて、其の道を盡くすは、其の、最大なるものなり。凡、此等の間に於いても、亦、自、進取

の義を存せざるべからず。何となれば、世には、惰慢の行あるもの多くして、眞正の婦行婦徳あるもの、幾、希なるが爲に、稍、道理に通ずると雖、朝夕の聞見する處に慣れて、自、其の行を怠り、或は、世、既に、斯の如し、豈、我が行を勵むを須ゐんやと、其の心を下し、其の志を弛ぶるものあり。斯の如くにして、敢て、人に先ち、人を匡さんとする勇氣を起さゞるものは、則、是、進取の氣象なきに、之由るものなり。故に、進取の義を存せざるべからずと云ふなり。

夫、進取の、退守と、其の關係、既に、斯の如く、事の細大を論ぜず、務の内外に關せず、總べて、人事の上に於いて、忽にすべからざるものは、此の氣象精神なり。されば、彼の柔順靜淑の德行を全うし、人生當然の務を成さんとせば、固より忽にすべからざるなり。故に、終日の間、乾々として、自、強めて、須臾

も息まざるもの、即、進取と、退守との本を務むる所以なりといふべきなり。

論說

德川時代女子教育史評論（一）

岡崎遠光

一、緒言

方今、日本に、眞男兒なきを憂ふる者、少からずと雖、日本に、眞女子なきを嘆く人、多からざるは、抑、何ぞや。今、果して、我が國に、女子たるの資格を具備する婦人多きを以て、之を憂ふるに及ばざるか。或は、我が國の國德を發揚し、我が世運を振作する所以のもの、女子に關係少しと見て、然るか。將、尙、眞男兒は養成する所以のもの甚、不完全なるを以て、憂國者、敎育家の意見、方法

が、未、女子社會を顧慮するゝ遑あらざるか。何ぞ、一方を憂ふるの切にして、他方を顧みるの冷なるや。世、或は、女子教育に熱中する二三子ありて、口に、女德涵養を唱へ、筆に、女風矯正を述ぶるものありと雖、彼等の、口や、筆や、其の社會に對して、如何なる効益を施したるぞ。未、女德は涵養せられざるなり。未、女風は矯正せられざるなり。啻ゝ涵養矯正せられざるのみならず、一種の邪なる風は、そよ〱と、家の園生を垣間見て、將に、無垢可憐なる若葉を吹き倒さむとしつゝあるなり。殊に、道德涵養、女風矯正の如きは、千文萬語、之を、口筆に弄するよりは、寧、德望家の風采に感染せしむるの勝れるに若かざるものにして、彼の所謂道德涵養家、女風矯正者が、德望家にもあらず、見識家にもあらずして、中々に、内行の修まらざる僞君子ならば、果して、能く、涵養矯

正の方法を仕遂げ得べきや。彼の女子教育を以て、自任ずる二三子は、口巧に、筆走り、之を、遠境より望む時は、誠に、女子教育家、其の人らしく見ゆと雖、近きて、之を觀察する時は、內行の修まらさる僞君子たり。實に、彼等の一部は、數年前、女子の權利を擴張すべしなど唱へて、恰、頑是なき小供に、利刀を與へ、以て、その自傷を速かしめたるものなり。又、彼等の一部は、ハヤリ女、女壯士と伍して、國事を談じ、政務を論じたる精神上のウカレメなりき。固より、女子の權利も、地平線以下に置くべからず。その國步艱難の際に方りては、國事も痛論すべし、政務を畫策すべしと雖、數年前の如き、時勢に狂化せられたる俗人の、杜鵑一聲、今や、過ぎて、過去の夢となりたるぞ幸なる。

茲に、又、彼の矯風會といひ、何會といふ如きは、果して、其の名の如く、實行

しつゝあるか。若、該會にして、彼の滔々たる世の會合の如く、只、相會し、只、相散ずる如き會ならば、否、聊、雜誌に、二三の論説を記載して、會費を取り立つる如きものならば、予は、實行の、其の名に及ばざらむ事を疑はずんばあらず。殊に婦人の會は、多く、笑を以て始まり、笑を以て終はるに非ずんば、只、茶を飲んで起り、茶を飲んで止むに過ぎずして、風俗を矯正し、教育を進捗する事などに關する事、希なるは、實に、通弊と謂ふべし。固より、會合毎に、一家一國の樞要を論談せよ。といふにはあらずと雖、徒に、名を矯風、親睦に假り來りて、拜々、疎濶を謝し、喃々、容色を品する如きは、時節柄、尤、無用の事なり。と信す。若し德川時代の如く、婦女をいへば、人形視せられ、お雛樣視せられし時ならば、貴重の光陰を徒費して、容色の瑣末を品評するも、亦、可なら

む。然りと雖、今や、生存競爭の時代なり。男女、殆、權利義務を同一にするの時代なり。昔の如く、棚に上せられ、籠に入れられざる代りに、氣樂の晝寐の出來兼ぬる時代なり。此の時代に生まれたる、婦女子は、舊時の如く、不幸中の幸福はなしと雖、更に、幸福中の不幸あり。而して、此の幸福中の不幸を招く所以のものは、實に、女子其の人の心底如何に存す。幸に、婦人にして、通有する「拜々」「喋々」的會合を避けて、其の妹女を教導する所以の方法に、心を傾け、專、家庭教育に熱中せられて、其の方法宜を得ば、或は、婦人の能事、全く終はれり。といふも不可なかるべし。果して、かゝる時は、己、何の必要ありて、矯風會員たらむ。己、何の必要ありて、雜誌に依賴せむ。元來、矯風會、親睦會などの起る所以のものは、矯正せられざる可からざる風俗、疎遠になる可からざる

交情あるによるものにして常に、俗正しく、情厚き時は、かゝる會合、雜誌の如きは、或は、無用のものたらむ。予は、かゝる會合、雜誌の無用となるの時期あらむ事を、婦人諸卿に、切望せずむばあらず。

又、眼を轉じて、文學界を眺むる時は、二三の女子あり。美文學に、才能を現して、一枚の妙筆、花笑ひ、鳥躍り、或は、男兒をして、後に瞠若せしむるものも見受けぬ。然れども、未、教育、宗教等の思想界、又は、美術界などに立ち入りて、小にしては、家名を轟かし、大にしては、國光を發起したるものゝ、甚、希なる、否、殆、之なきは、抑、何ぞ。徳川時代に於いては、女子教育の方法、完全ならざるは、いはずもあれ、其の事、完全ならざる故に、其の程度も、極めて低かりしにも拘はらず、其の教育法の改革せられ、多少、進捗せられたる今日より、此

較上、思想界、美術界に於いて、女丈夫の、多く輩出せるは、又、抑、何ぞ。是に於いてか、予は、今日の所謂教育家の理想が、決して、實行せられつゝあるものにあらざるかを疑ふ。たとひ、改革せられ、進歩せられたる理想と雖、實行せられざらむか。理想なきと一般のみ。ライプチッヒ大學の教師ゲオルグ、エペルス氏曰はく、『一國教育の盛衰は、女子教育の如何を見て推察せらる』と。若、此の言まして、眞ならば、予は、今日の女子教育家に對して、我が國全般の教育の盛衰如何を問ふを苦しまざるを得ず。

（緒言未完）

いく千代も
おなじ月日のめぐりきて
かはらぬ御代は
空にしるしも

女子處世論（五）

三輪田眞佐子

第五　身體の健康

精神と、身體とは、相關係するものなり。故に、身體健康ならずば、從ひて精神爽快なること能はじ。精神爽快ならずば、萬端の任務を盡くさんこと難かるべし。女子は、殊に、朝は、衆に先ちて起き、夕は、衆に後れて寢ね、心は、綿密、身は、輕快を要するをもて、身體強壯にあらずば、其の天職を、盡くす能ふまじきことぞかし。大抵、舅姑に嫌はるゝ嫁、良人に棄てらるゝ妻は、身體多病なるか、若くは、柔弱にして、女子たる任務を盡くす能はざるに基くもの多からん。又、女子が、老後の身を托すべきものは、子なるに、其の子の強弱は、母の強弱如何に遺傳すべきものなれば、母たるもの、自、強壯ならずば、到底、末路の安

樂、期し難し。否、身體を強壯にせんは、唯、自身の爲に止まらず、孝行の始なり。孔子曰、敬身爲大、身也者親之枝也、云々と。否、天下の母なる女子の身體を強壯にせんは、國家隆盛の基ならん。おのれ、思ふ、喬木に棲み、大岳の間に翺翔する鷲の子にあらずば、鷲たるを得ず。千里の野を奔逸する虎の子にあらずば、虎たるを得ず。倔强の國民は、必、倔强の母より產まれんと。現今、世界の國々、各、口に、博愛を唱ふるとも、其の實、劒を磨き、銃を備へ、他國を倂呑せんと謀るとかや。然るに、我が青年子弟は、日に、軟弱に流れ、月に、矮小になり行くめり。あはれ、邦家の前途を慮るもの、誰か、之を憂へざらんや。おのれが、女子の處世を論ずるは、單に、女子の一身に關する一時の榮華を利せんとする如き詐術的のものにあらず。嗚呼がましくも、明治今日の女敎、施いて、

將來、大八洲強盛の源となれかしと思へばなり、故に、一言半句も、自然の大道を離れんことを恐るゝなり。豈、詐術を説かんや。成尋法師の母は、「もろこしも天の下にぞありときく照る日の本を忘れざらなん」と歌ひけり。諸孃、心して、女子と、國家との關係を知り、國家の母を以て任ぜざるべからず。あなかしこ。

斯く、強壯は、女子に肝要なればとて、一擧、千斤をあげし板額となれ、一跳、百斤を動かしゝ巴御前となれと勸むるにはあらず。是非、女子たる任務を全うするに足る健康を養へかしと祈るのみ。されど、其の健康の法は如何と問はれん乎。おのれは對へん。元來人には、天性より、強弱の區別定まるもの多ければ、天稟多病の女子をして、健康無比の女子となさんことは、[illegible]難し。然れども、人は、攝生以て、強き者は、益強くなり、弱きものは、聊、強くなり得べければ、各、怠

らで攝養せざるべからず。この攝養こそ、健康の法なれど、抑、人は、身體に必要なる相應の滋養を食はざるべからず。我が往時の女子は、生理の何ものたるを知らざるもの多きと、不殺生戒の教理より來る影響とを以て、滋養の供給を欠きけんと思ふなり。されど、又、貧富の程度を考へずして、徒に、珍味美食を貪りしが爲、財を散じ、身を亡ぼしゝ例少なからず。戒めざるべけんや。今日、歐米富裕の國俗を倣ひ、徒に、奢侈を極むるもの多し。誰か、志あるもの、將來の國運を憂へざらん。故に、攝養の道は、飲食の品質如何を主とせんより、寧、運動を重んずるにあり。昔、五禽の戯をなして、長命を保ちしものありたりしとかや、全く、運動の功德になんありける。抑、中庸は践み難きものにや、日本の女子は、靜淑の風采を尊ぶを以て、動もすれば、柔弱の

弊に陥り、遂に、運動の欠乏を來し、疾病を招くものさへ少なからず。思ふに、運動は、必しも、體操、散歩等に限るべきものにあらず。日夜、針業を事とする女子も、心に、運動の必要を感じ、擧止を輕快にさへすれば可なり。否、擧止を輕快にせんは、豈、唯、強壯の基たるのみならんや。又、家政整頓せんを以て、安樂の緒ともならん。凡、生理、衛生を説くものは、必ず言はん。人の食物は、米、麥の如き澱粉質を幾分量に、牛、豚の如き蛋白質と、脂肪質とを幾分量に食ひ、猶、植物酸も、消化に必要なれば、食後には、必、食ふべし、而して、食前、食後には、略、一時間ばかり、勞働を休まざるべからず、云々と。實に然らん。されど、其の規則を、寸毫違はで守るに足る地位の人は、兎まれ角まれ、多數の人は、財力と、時間とのため、悉、之等を守る能はざるなり。故に、此の規

則を學ぶものは、唯、事情の許さん限り、之に從ふべきものとのみ思はざるを得ず。然らずば、反りて、食前方丈の奢に陷り、一家の衰亡を來すやも知り難からん。蓋、人は、其の國產を以て生活するは、自然なるべし。豈、農を以て、天下の大本とする瑞穗國の人民にして、容易に、其の常食を變ずべきものかは。まして、赤子泣く秋の夕、之を棄てゝ、近街を散步し、頭に、雪を頂く婦人、手を振り、足を揚げ、體操せんも如何。思ふに、我が國風の許さゞる處ならん。西洋とても、決して、擧りて、斯の如きことはなし能ふまじ。現に、「ドライデン」の詩句に、神は、もと、病を癒さんことを、人に委ねず、とありとかや。こは、人は、働きさへせんには、其の自然的運動を以て、强壯となり得べければ、故に、時を費して運動し、醫を迎へて治療するに及ばじとの意ならん。諸孃、輕快に

働け。自、健ならんかし。

次には、空氣の新鮮を撰ぶことの必要を知るべし。無學の女子には、空氣の効用を知らざるもの多し。亦、光線の射入を測るも肝要なり。然るに、之を知らざる女子は、光線の乏しき陰氣なる隅坐に閑居するを厭はざるもの少なからず。明治の女學生は、これ等の利害ばかりは詳にするもの多からん。そは、西洋學の長所なればなり。亦、食物の適度を量らざるべからず。聞く、妙齢の女子は、徒に、柳腰たらんことを望むより、食物上、斯くせば、嬋妍たる姿とならん乎など妄想して、身體の健康を害するを顧みざるものありとかや。昔、唐土に、宮中、細腰を好みければ、城中、餓死するもの多かりきと、文に見ゆ。或は、其の、既に、老に近ければ、目前の快樂を取らんとて、庖厨に、座を占むるを幸とし、定時

の外に、過分の食物を貪り、然も、運動を忘るゝを以て、一種の内臓病を發し、反りて、短命の基をさへなすもの多きとぞ。古人、飲食の人は、則、人、之を賤しむと曰ひけり。若、生命保存のためならで、情慾のため、飲食をなすものあらば、今人も、尚、之を賤しまん。或は、中古より、俗裝の流行となり、頸ゟ、白粉を施す甚しきをもて、遂に、衣襟の汚れんを恐れ、首を、前方に屈し、自然の姿勢を害し、胸部を縮むるは、掩ふべからさる事實なり。其の他、衣帶の着用總べて、宜を得ざる件々少からず。希はくは、孃達、心して、身體の健康を謀れ。健康は、幸福を與ふるものなり。

史談

加賀千代

鹽井雨江

加賀の千代。才氣は、春水の漫々と溯るばかりにありながら、素行は秋水の露むかり濁らず、人も心も風流幽雅、げにや千代一遇の才女といふべき千代子は、加賀の國松任といふ里の人にて、ろが父母は、表具の業を渡世とするものなりけり。あやまきが中にも、流石に、風雅なる渡世、自らさる營みのゆかりにやありけむ、千代子が天性の風雅、世の常ならず。母の膝に這ひまつはる頃より、謠歌などをよろこび、女の童の、やゝ心知りてよりは、頻りに誹諧の道に心懸け、淺き年齒に深き心、大人にも立ち勝りて見えけりといふ。

されど、天ざかるひなの果、名も知らぬあやしき草木のみ多かるわたりなれば、道の案内と頼まむずる程の名あるものもあらず、遠近より訪へる人ある毎に、必ず、其道の達人あらずや、知りてあらば敎へてよ、きゝ玉ひしはあらずやとのみ問ひけるが、美濃の國に、盧元坊といふ人あるよし敎ゆる人ありけり。兼てより、思ひが

けたる達人の、在りと聽きたるに、身を置く方も覺えぬ嬉しさに、立ちつ居つ又思ひやれど、見亘す天も思ひわかぬ美濃のわたり、女子の一人は、行かむ方覺束なさに、涙も出むばかり悲しく、つくぐ\とながめ暮してありけるが、折りこそあれ、そが達人と聞えたる盧元坊といふ人の、行脚して松任の里に來りたるに、千代子の愁顏、一時に晴れぬ。

直に、そが旅宿に訪づれたれど、折りしも盧元坊は、草の枕の苦るしさに、流石勞れたりとて、宵より夜着打ちかつぎて寢ねたり。千代子は、盧元の寢ねたる襖近うかしこまりて、誹諧の道、多年の望めるほどを語り、敎を求めければ、盧元坊は、床をも捨ず、枕をもたげず、さらば、何にまれ一句をせよ、取るべき方もあらば、敎へねさせむとありけり。千代子は痛く悅びて、折りふし夏の初めつ方なりければ、時鳥の題やよからむとあるに、千代子は沈吟寸時、軈て一句を詠みたるが、あまりに勝ぐれて、なかく\に初心の口吻にあらざりければ、盧元は、千代子の句に非らずと思ひてうけがはず。さらむとて、また一句を吐きたるに、盧元は耳も傾けず。千代子も、又更に心にとめず軈て又一句を思ひつきて、こたびはと吟ずれば、こは

如何に、盧元は何時しか打眠りて、いびきの聲の外は、應答もあらじ。餘りの人の振舞ひながら、千代は更に見も歸らず、猶も唯獨り時鳥とよびて、已れも又他事を知らぬばかりなりけるが、盧元は遂に目覺めず、夜もほの〴〵と、何時しかにあかく、朝日の枕に映ずるに、盧元は初めて驚き、いまだいなで其處に在りてか、夜は明けてかと問ひければ、千代子は、思はずも一句、

　　ほとゝぎすほとゝぎすとてあけにけり

と應答ければ、盧元は枕を叩きて感嘆一聲、いしくも詠れたり、其心こそ忘れられな、必ずや名人とならむ。能き弟子得つるものかなとて、直に師弟の契りを結びしといふ。終夜時鳥の一句を沈吟したる熱心、千代に消えぬ名聲を殘したるものむべなるかな。

他に兄弟の家を續ぐ者なかりければ、父母のすゝめに夫を迎へて、自ら家を繼ぎけり。夫を迎へたる時

　　しぶかろか知らねど柿の初ちぎり

才氣は溢るゝばかりなれど、心の掟も振舞も、正しき道を踏みて、更に亂れたる方

なき千代子。父母にはかしこまりて仕へ、夫にはやさしく振舞て、やまと島根の女子の、心も行も欠けたる所も無かりしが、幸なくて、僅に二十五歳といふ年、花にも月にもかへまじものなる夫なる人、空しく浮雲のはかなき影と消えて歸らず。風樹のうらみ、落花のむねむは、風雅の心には、又一入のあはれなりけむ。千代子の愁嘆は、いふむかりもなく、

起て見つねて見つ蚊やのひろさかな

といひて、ありつる床をかひなでゝは、伏し轉びてのみ嘆きぬ。男子一人在りけるに、わが家をつがしめ、自は緑の髮、花の色と共に思ひ斷ち、二十五歳といふ年尼となり、素園と呼びて、郷里の邊りに、世外の人となりぬ。尼と成りける時、

髮を結ふ手の隙明て炬燵かな

その後は、唯風流を友とし、幽雅を伴として、又塵世のけしきを尋ねず。天外の孤雁、澗底の孤松、唯結ぶものは世外の風月霜露のみ。閑居の折りふしは、遠近を行脚したるが、桑名のわたりにて、

見るうちにわすれて仕まふ柳かな

また簑生濱といふ所にて、

蛙鳴てろの簑ゆかし濱づたひ

また越の日和山といふ所にて、

ゆふだちの道よりもなし日和山

又一瓢庵といふ庵にて、

九十九をよそに持ちたるふくべかな

書も越後の國なる呉俊明といふ人に學びたるが、頗る風韻に富みて、今の世に傳はれるは、百合の花を書きたるが多し。或人來りて、書を上に書き、讃を下にかき與れよと云ひければ、千代子は直に筆を取りて、朝顔の花の蔓のたれたるを書き、其の紙の裾に、

あさがほや地に咲くことをわぶながり

又永平寺の長老が、一念三千の意を句に作るべしと需めける時、

百なりも蔓一筋の心から

などいふあり。一生の名吟、掲ぐるに暇あらねど、聞き覺えたるまゝを

初雁や山へ配れて野に足らず
青柳はどこに植ゑても靜なり
こぼれては常の水なり紅の露
朝顔や誠ははなの人ぎらひ
酒買の戻りは樽に野梅かな
朝顔につるべとられてもらひ水
浮草や蝶の力の押へても
ゆふがほの宿や茶の香も水くさき
田うゑ唄あしたもあるに道すから
卯の花や垣の結目も降かくし
釣竿の糸にさはるや夏の月
朝顔やまだともしびのかげもあり
蝶々の身の上しらぬ花野かな
秋の野や花となる草ならぬ草

行水におのが影追ふ蜻蛉かな

名月やよしのゝ葉にもさきあまり

菊咲ひてけうまでの世話忘れけり

けふになりて草臥をかし菊作り

夕顔の身は持ちにくし秋の風

水仙の香やこぼれても雪の上

わか草や駒の寝起もうつくしき

七草や都の文を見る日數

山彦はよその事なり若菜摘

うぐひすや都きらひの竹の奥

此の外數多あれど　思ひ出です。十文字七文字わづかにもの云ひながら、心は百萬の言葉にも盡くせぬあはれを含め、等閑にいひながら、詞自ら、けだかく清らなる、殊に何となう、やさしうたをやかなる、自ら心の露、心の花、心のふしのこぼれ出でたるならむ。其の人の平生のけしきも見えて　なづかしくあはれになむある。

みまかりたるは、八十歳を越えての後ならむ、八十歳の賀に、いへる句あり

涼しさやことに八十手の松の聲

福永長女が事　　蒲城　弘

近江國蒲生郡古市村の長女は、福永某の後妻なり。某に先腹の子二人あり。長女が產めるは十餘人ありけるに、長女は、先腹の子をいつくしむ事、吾が產む所に超えたりけれど、見る人感せざるは無し。且其の子の數多きが爲に、先腹の子疎からんことを恐れて、男子をば七八歲に至れば、夫に勸めて出家せしめ、女子をば、悉く京に上せて、人の婢たらしめき。かゝる程に、先腹の子どもゝ、其の慈愛にひかれて自至孝なりけり。兄は其の家を嗣ぎ、妹は、その妹等の京に出でしことを思ひ、吾も京へ出でんと言ふを長女は之を許さずして、隣村の某へ嫁せしめけり。されど、深く其の恩を感じて繼母の生涯、起居を問ふ事嘗て少も怠る時なかりし。長女後に髮をおろしけるが、彼の出家せし子ども、某々の寺の住職となりし者、折々に呼び迎ふれども、實子の愛にひかれて、先腹の子の方を去るは、人の譏をも受けんことゝ

ろよからずとて、敢て從はざりき。遠近の人々、其の行を聞きて、之を稱賛せざるはなし。安永六戌の年に老いて身まかりぬとぞ。

なべての世の人の、其の先腹の子を疎み惡みて、養育の道をだに盡さゞるもの、誠に多きは極て惡き習ひなれども、之を顧みざるが多きに、長女の如き、巳が子の十餘人にも代へて、之を愛養せしは、誠に世の稀なる所なり。此ぞ世の人の母たり、殊に繼母たるもの丶鑑なりけれ。

家政

看護法捷徑（三十八）

三笠舍主人

第五編　傳染病の心得方（つゞき）

（三）窒扶斯

一窒扶斯に二種あり、一を腸窒扶私と言ひ、他を發疹窒扶斯と云、從來我邦にて、單に熱病と稱へ來りしものは、多くは腸窒扶私也。

二、腸窒扶私に罹る時は、最初、夜間眠易からず、身體、四肢、何となく疲れを覺えて力なし、食欲進まず、頭重く、強て動作する時は、眩暈を發する等の前兆あり。次で一二日の後、俄に惡寒を覺え、程なく熱發して、體温攝氏四十度、若くは其以上に昇り、(朝は大抵一度前後降るを常とす)脉數增して、一分時間八九十乃至百搏、若くは其以上に昇り、皮膚乾きて肌熱高く、唇、舌、其外口内乾きて渇を覺え、食欲缺乏す。此等の症を發し來ると同時に、多くは數回下痢するものなれども、症に依りては、却て便秘するものありて、一樣ならず。それより、兩三日を經れバ、多くは、精神の異常を來し、譫語を發す。

三、右の如き容躰ある時は、看護者は、先之を醫に報知し、置き、取敢へず、前額に冷罨法を施し、兼て冷水、若くは氷水を適宜に與へ、患者を安靜ならしむべし。

四、醫の診斷に據りて、腸窒扶私と決定したる時は、速に病者を別室に移し、妄りに他人をして、病者に接せしめず、器具等も、一切他と混用すべからず。又患者の上りし厠は、閉鎖して、嚴に他人の上るを禁ずべし。

五、腸窒扶私の消毒方は、醫の命に據るべしと雖、概ね左の如く心得べし。

排泄したる物、(兩便、又は吐物の如きもの)の消毒は、粗製碌酸、又は假性石灰、若くは石灰乳、(共に藥名)を加へて、能く攪和して後、燒却し、若くは深く土中に埋むべし。

被服……器具類の、甚く病毒に汚れたるものは、直に燒却し、汚れたる疑あるものは、熱氣消毒法、(消毒裝置を用ひて、汚染物を、一時乃至一時三十分以上、攝氏百度の熱氣に當て、病毒を燒殺する法を謂ふ、消毒所、又は病院にて行ふ也)、若くは煮沸消毒法、(汚染物を煮沸する事、三十分乃至一時間にして、病毒を煮殺す法を謂ふ、最初一旦消毒藥水に浸して後、煮沸する事有、煮沸後は、更に清水にて洗ふべし、)を行ひ、又は二十四時間乃至四十八時間、石炭酸水(石炭酸五分、水百分のもの、以下同し、)に浸したる後、清水にて洗ふべし。

食器、盥漱器も、煮沸消毒法を行ふべし。木製便器は用後燒却するを確實とす。

金屬製、陶器製のものは、石炭酸水にて洗ふべし。

家屋の消毒は、通氣消毒法、(窓牖を開放して、換氣を盛にするを謂ふ、其時間は、成るべく久しきを要す、)乾燥消毒法、(日熱、若くは火熱を用ひて、乾燥する法を

謂ふ、多くの病毒は、長く日熱に觸るゝ時は、生機を失ふもの也）を用ゐるべし。されども、室壁等の、患者の排泄物に汚染したる部は、石炭酸水にて洗ひ、濕ひたる儘にて、通氣し、二十四時間を經て後、更に他の藥水五十倍の熱き苛性曹達水石炭酸水にて、再び洗ひ、更に二十四時間通氣して、乾燥せしむべし。寢臺、其外木製の器具等も、亦皆此法に據り消毒し、且日に曝らすべし。猶消毒の精しき事は、醫の差圖に從ふべし。

六腸窒扶私の經過、善良なる時は、大抵、二週日乃至三週日にして、熱次第に下降して、平温に復す、（多くは、一度平温以下に降り、再び昇りて平温となる）平温に復する後と雖、全身の衰弱、其外の症は、容易に故に復せず。猶時日を要す、此間の攝生方、甚肝要なり、特に食欲の進むに任せて、少しく食を過すか、又は硬き物などを貪り食する時は、忽ち再發し易く、一度再發する時は、容易に痊癒し難きものなれど、快復期の攝生方は、最も大切にして、少しにても、醫の命に違背すべからず。此間の看護者の責任、甚大なるものと知るべし。

七發疹窒扶私は、腸窒扶私とは別病なれども、其症狀、甚腸窒扶私に似て、一層劇

しく、傳染の性、極めて猛烈にして、熱性強く、全身赤疹を發するが故に、此名あり、此病、囚獄、又は船舶等、衆人群居の場所に多く發するものにして、幸にして、膓窒扶私の如く、常に各地に散發する事、甚稀なり、消毒及其外の取扱方膓窒扶私に同じく嚴重を要す。

學園

源氏物語の宇治の卷を讀みて（一）

鹽井雨江

第一　文章の評

紫のゆかしき筆のいろもて、書きなかしたる源氏物語、いづくもあはれにめでたきが中に、宇治のわたりの物語りは、殊にかなしうもうつくしくあはれなるさま、秋のけしきにもたとへつべう思はれて、ゆかしうあはれなり。母かたなども、やむごとなく、九重の御園生ふかくましまさむ八の宮と申し奉る宮が、ゆくりなき事の災より、何時か見捨てひともおぼさぬ世の中に、うち捨てられ給ひて、世にありて世

になきむかり、さう〴〵しきおん住居。北の方と諸共に、ふかき御契りの、二つなきむかりを、互に朝夕のおん慰みとおぼされて、さすがに軒ばの雲の、ものはかなきたゝずまゐしたまふといふあたりは、さながら秋のはじめ、梢のみどりは、昨日に變らず見えながら、吹く風の、何となら籬の桐に音たてゝ、軒端の露、おきふしの唯ならぬけしき見ゆるかごと思はれて、讀む袖に、むら〳〵と一雫二雫、露の散りかゝる心地するもあはれなり。

それより、北の方は、むなしうかくれさせ給ひて、八の宮は、並ぶかたなくさびしき御心。春たち歸り、うらゝかなる日も、歸らぬ人をおぼしなげき給ひつ。霞にも花にも、心はうきもたゝず、唯つく〳〵とながめ給へた、池の水鳥などの、羽根うちかはして、樂しげなるさま、御覽せさせたまふにつけても、唯ありしおん袖の、なつかしくおぼし出でられ、堪へむとすれど、涙はえ堪へずなり給ひて、なく〳〵おん袖をかきあはし給ひて、つれに離れし水鳥の、このかりのよに、獨り遲れたるを、あなうしとわび給ふあたりより、ありつる家さへ、あへなく煙と消ゑはてゝ、八の宮は　なほ奧ふかく世を宇治山の山ごもり。げにあすか川の定めなき世としいへど

玉の宮居、錦のふすま奥ふかくましまさむおん身が、峯のあらし河のおとじろ、ものすさまじきおきふしは、いかばかりの御恨みなりけむ、思ひやらるれど、宮は露ばかり、おん恨みもあらせ給はず、唯つく〴〵とながめくらし給ひて、みし人も煙となり、ありし宿も灰となりし世にと思ひ給ひては、など、この身は、消えもせず、かくは心にもあらぬ世にし残るらむと、なげき給ふあたりは、さながら秋もます〳〵ふかく、ものゝあはれは、木の葉の色のいろにも出で、尾花の袖の露にもこぼれて秋の上葉の風、いよ〳〵身にしむ夕ぐれ、尾の上のあらしのたえ〴〵に、妻こふ鹿の鳴く音のきこえたらむがごと、あはれは、身もよもおきまどふ心地ぞすなる。薫中將が、宮を慕ひ奉りて、はるかに山家を尋ねゆきて見るに、きゝしより思ひしより奥ふかく、白雲のかげも、はかなき草の庵を書きしわたりは、筆おのづから清くけだかく、世をはなれたるけしき見え、讀みゆけば、何となう心の塵の靜まる心地するばかりなるは、さながら秋の夜の空も月も澄みわたり、いははしる清水の、音すゞしげに、流れたらむがごとし。

それより、薫がふたゝび宮の庵を尋ねむと、曉ふかき山路のしげみの中をわけのぼ

りたまへど、まなく吹しく山風に、木の葉の露の、はろ〱とこぼれて、いたくぬれ給ふさまをいふあたりは、文も、また露のいよ〱亂るゝごときけしきにて、秋の上葉にはあらねど、兩の袖の露、いよ〱おもく、あはれはます〱深し。

姫君たちの、人ありともしらで、さうの琴琵琶など かきならべ給ふを、竹のすいがいのもとに忍びて、かひまみ給ふあたりの文の、いろ〱にあやどりて、をかしうあはれあるさまは、さながら秋の野の、千草八千草の、千色八千色にさきこぼれ、遠近の山のもみぢ葉、薄く濃く染めなしたるを、霧のたえまに見、あるは松のみどりのあはひより、木がくれて見るごとき景色に似たり。わきて、姫君が撥もても、入るさの月は招きつべしなどいひて、よねむなげに見え玉ふあたりの筆は、文も、また山の端の月のにほひゆかしく、なつかしう心にとまりて、かたときも捨てかたく、忘れがたく、名殘りあやしう思はる。

薫中將が露にやつれ玉ひしかりぎぬの姿にて、辨がむかし語をきゝ給ふあたりより、尾上に遠くみ寺の鐘をきゝ給ひて、八の宮のこもらせ給ふあたりのおんそらを忍び給ふあたり、また川邊の營みをながめたまひて、うたかたのあはれを感じ給ふあた

りは、文といひ筆といひ、心はます〳〵深く、情はおのづとこぼれかゝるばかりなるは、げにや稍のもみぢば、ます〳〵あかく、草葉の色いよ〳〵深く、吹く風の露、はらへどもはらへども、袖に衣手に散りまどひて、やるかたもなきに似たり。八の宮、ます〳〵心細く、ものはかなげに思ひいられ、この世にはおぼしはなれ給へども、さすがに放ちがたき姫君たちのお袖を、いよ〳〵思ひ細り給ひて、薫の中將を、露のたのみ所におぼし殘され、また姫君たちに、何となう、おん身散り給ひての後の根ざしを、かたうせよと敎へきこえ給ふあたりは、稍のもみぢ草葉の色、うつりにうつりゆきて、風いよ〳〵つらく、露ます〳〵重きに堪へむやうなく、はや幾日もあらず、おぼつかなく見ゆる秋のくれ、尾上の鹿のよぶ聲、いよ〳〵あわれに、野末の虫のなく音の、いよ〳〵細げなるけしきにもまさりて、あわれにおぼゆ。

はつか　三　ひめ君　ちゝのみや　な　てら　に

八月の廿日むかしのおん事、姫君たちは、父宮のこもらせ給ひしみ寺の方を、つくづくとながめ給ひて、立つ霧のゆくへもわかぬ思ひ迷ひし給ひてありければ、かなたのみ寺の鐘、つねならず、細々と響きて、こなたもなか〳〵に、身も心もきえむば

かりなるに、父の宮のむなしくなり給ひて、はやこの世にては、おん聲も、いつか聽く事叶はずならせ給ひしとの音づれのきこゆるに、今更にわくかたもなくおん涙にむせび給ふわたりは、梢のもみぢも、草葉の色も、はや移りはてゝ、風のうらみ露のあはれも、これを限りといふ秋の終り、尾花のたま〳〵と、よるかたもあらで、なびくがごと、白菊のかれ〳〵に、離にすがりて匂ふほどのけしきにも通へり。げに、紫がゆかしき筆の色の、めで度くあはれなるも、これを限りとおもはれて、あかずなつかしう、名殘りはつらむよしなく、類く方なき心地す。げに、四季折りふしのながめはあれど、あはれは秋なんまちりぬる。源氏の物語り、こゝもかしこもめでたかれど、あはれみは、この宇治の巻なむまさりたる。

ゆるさじと　風だに
爻がせきな　いかで
すへおかば　やすくこゆべき

（蝮玉集）

漫録

質問の答　　黒川眞頼

一近きころの歌に、ゆくへといふべき所をゆくてといふことおほし、よりてその差別のさとしをこふ。

ゆくへはゆく方にて、ゆく方をいふ。ゆくては行く道にて、ゆく道をいふ。しかこゝろうべし。

一霜まよふとは、いかなるさまをいふにか。

まよふとは、すべて、眼力のよくおよばずして朦朧たるをいふ。されど、冬の空の霜くもりせるを、霜まよふといふなり。新古今に「霜まよふ空にしをれし雁かねのかへるつばさに春雨ぞふる」とある歌をもよく味ふべし。雲まよふといふも、雲のたちわたりて、ものゝさやかならぬをいひて、まよふといふことはおなじ。

一しぢのはしかきのこと、

これは誤寫なるを、そのあやまれる詞をつたへて、それに附會の説どもをつけて、しぢは榻なりなどいひ、その榻に百夜臥すべき契約をしたりなどいふことさへいで來たるなり。しか誤り來たるはじめをいはゞ、古今集戀五に「あかつきの鴫のはねかき百羽かき君がこぬ夜はわれぞかずかく」とあるを寫し誤りて

あかつきのしぎのはしかきもゝよかき君がこぬよはわれぞかすかくとつたへて、袖中抄などにも載せたるは、はやくより然か寫しひがめてつたへたるなり。されば、今は歌によまざるかたよろし。

一ひぢかさ雨とは、いかゞのこゝろにか。

ひぢかさ雨とは中むかしころ急雨をいふ詞なりとぞおぼゆる。源氏物語須磨に、俄に風吹いでゝ、空もかきくれぬ、ひぢ笠雨とか降きていとあわたゞしければとあるを見るべし。さるは、雨の俄にふり來れむ、肱を擧て袖にて頭をおほふよりいふならん催馬樂の「妹が門にいもが門やせなが門や行過かねて、やわかゆかむ、ひぢかさの雨もやふらなん、してたをさ、あまやどりかさやどりやどりてまからん、して田をさ、」とうたへるも俄に雨もふらなんといへるにて、おなし意な、りこの。催馬樂は、萬葉十一に、「妹か門ゆきすぎかねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせん」と云へる古歌をうたひかへて久方を肱笠とし、そのほかをもところどころうたひかへてをかしくうたひなしたるものなり。されば、肱笠雨といふ詞は、延喜天暦頃はもはらいひたる言なるをしるべし。さればこそ、紫式部、淸少納言も源氏物語枕草紙にはもちゐたれ。

和歌の浦のむれゐてあそぶ友鶴よ
幾千代ふさもこゝろかはるな
（林下集）

あうむ文學（六）

楢の舎主人

○懷舊（一）

十六年も一むかし、あゝ夢にてありけり、とあつき涙はろ〳〵こぼしけむ熊谷次郎丹治直實が懷舊は、花の盛の敦盛卿を討ち奉りて、無常を悟りしによれりとかや。されど、遂に九品蓮臺一つ蓮の緣を結び、一念彌陀佛即滅無量罪と觀じて出家しけるは、あはれなる懷舊になむ。歌聖人麻呂ぬしが、大津の舊都にて、「いはゞしる、近江の國の、さゞなみの、大津の宮に、あめのした、知ろしめしけむ、天皇の、神のみことの、おほ宮は、こゝと聞けども、霞たつ、春日かきれる、夏草が、繁く生ひたる、もゝしきの、おほ宮どころ、見れど、悲しも」とうたひたる感慨の深さ、志賀の辛崎岸うつ浪よりも高き調、その地とその人とをあはせて追慕するに至るも、反つて不思議の懷舊なりかし。また、かの詩仙李太白が、只今たゞ西山の月のみありて、呉王宮裏の人を照らすと詠じたる、或は、盧照隣が、桑田碧海須臾にして改まる、昔時の金階白玉堂、只今たゞ青松のあるを見ると吟じたる、靜御前が吉野にて、「ありのすさみのにくきだに、ありきのあとは戀ひしきに、あかではなれし面影を、いつの世にかは忘るべきと」謳ひけむなど、東西人異に、自我觀物他觀の區別なきにあらねど、何れも、その感ぜしところ、その觸れしところを、巧に吟詠せるなれば、句々無限の感情こもれり。古來、題目とせる懷舊或は古意などは、

おほむねみな、盛衰變遷のあとを推して、有爲轉變のはげしきを悲しむの熟語に用ひたるなれど、その意義狹くして、反面の感懷、即、往時を追想するがために、生じ來る快樂のかたには、絶えて用ひざりしにや、過去を追想せば、つねに悲哀となるに限るべきにあらねど、懷舊の熟語を以て、人生の陰影たる、不幸悲哀の現在のありさまは言ふも更なり、その陽面たる、幸福快樂の過去のありさまを描くにも用ひなば、更にその意義を廣くするに足らむ。

懷舊は、現在のあぢきなきを歎くよりおこるならむ。過去のたのしかりしこと、福おほかりしこと、これあらむには如何にうれしからむ、と悔いもし、悲しみもし、哀みもし、また、悔やしがり、つらがり、悲しがることもあらむ。さては、額を垂れ、瞼はらし、齒くひしばり、膝もとに力いれなど、所により、をりにつけて、さま〴〵外貌にあらはるゝものなり。時ありては、もらひなきすることもあらむ。また、見ぬ人知らぬ人のうへをさへ、あはれと思ふこともあらむ。されど、徒になき過ぐるやうなるは、近世のあしきならはせならむ。いにしへは、懷舊の、文字にあらはれたるものとても、涙のみにはあらざりけらし。今は然らず、懷舊といへど、字々句々、悲しとか、つらしとか、悔やしとか、おほくは、から涕に流るゝは、そも何故。人情の薄からざるゑるしかと解すれば、誠に賴母しくなつかし。金箔にや、めつきにやと釋すれど、いと〳〵をかし。古は、心に涕きしが、

今は、眼になかせ、古は、一滴の涙に天地も焦がれしか、今は、萬斛の涙も氷塊よりひやゝかなり。古は、かなしかりしがために泣きけり。今は、あはれがらせむとして泣く。今の涙は、山師のごとく、古の涙は、老舗のごとし。鹽谷判官の切腹を見ては、小野九太夫も必なきしあらむ。遲參の由良の助、いかで涙こぼれむ、こぼれざりけむといへども、内心には熱湯にえかへりしならむ。俳優富十郎、まことによく泣く。なくといへども、泣かざる團十郎の精神には及ばず。あまりになき過ぐるは、反つて茶番狂言となる。さらば泣かざらむか。いな〳〵、要はたゞ至情によりて動くにあるのみ。

われ、今、泣かむがために懐舊するにあらず。わが幼年のありさまの、腦中にあらはれ來たりて、わがなぐさみとなるものを寫して、今の快樂と幸福とを助くる料となす。されバ、ひと目には、うぬぼれとも見られむ。つまはじきもせられむ。見られむせられむは、われ、露ほども痛痒を感せず。されど、益なきくり言をならべて、貴き本誌をけがさむとは、今日までもたくみ居らざりき。これもまた、後の懐舊の種ならざらめやは。

○俊頼卿のうた

源俊頼卿の秀歌は、人口に膾炙せるもの極めて多きが、他の非難を受けたるも、またなか〳〵多かりき。

基俊朝臣は、卿の「口をしや雲ゐかくれにすむたつもおもふ人にはみえけるものを、」を難じて、口

をしやなどよみたらんは、無下にてぞおぼえ侍れ、和歌詩などは、詞をえりて、先花後實とぞ、いにしへの人も申しける。されどにや、諸家集、並に、歌合などにも、此詞よみたりとも見えず。況やまた、初の句にもあらず。又、雲井かくれに住む田鶴といふこと、和歌にいまだ見出し侍らず。唐の文の中にやと疑はれ侍り。若、世説といふ文に、鳴鶴日下といへる心をよまれたるにや。次の句に、青き雲をひらいて、白き鶴をみるところ侍らめ。鶴といひながら、雲の中に住み侍るべきところ、淮南鷄ぞ雲には入り侍りければ、又若は、つるといふことにや。然者、源進公相鶴經と云ふ文に、つるは、百八十歳にて雌雄あひて、はらめる事は侍れ。さらで、人といふことは、いかに可謂にか。又、雲井かくれに住むといふところもなけれど、ことわりともおぼえずといへり。然るに、この歌のは、鶴にはあらず、龍なり。揚公が、眞の龍を見んとおもへる、志深かりしかば、眞龍あらはれし由あるによりて、かく詠まれたりとぞ。「とへかしな玉ぐしのはにみかくれてもずの草ぐきめぢならずとも」のみかくれてを、水陰なりと難じ、後に朝臣も、「みこもりにいはでふるやの忍草しのぶとだにもしらせてしかな」と詠みて、このみこもりは、萬葉に水陰とかけり。いかにして、軒のしのぶにはよまれけん。俊頼のみかくれを難じける人にして。と契沖阿闍梨に冷評せられたり。九月盡の、「わけぬともなほ秋風は音づれて野邊のけしきにおもかはりすな」を、いかにも歌は、こしの句の

すゑるにて、文字すゑつるに、はか〴〵しきことなし。さゝへて、いみじくきゝにくきものなりと難せしを、僧琳賢、貫之が「櫻ちる木のした風はさむからでの、て文字を長々と唱へたるに、朝臣は、顔蒼ざめうつぶきたるを見て、俊頼卿、忍びやかに笑ひきとぞ。契沖阿闍利も、中ごろよりの歌に、腰句にてもじをすゑたるおほし。後の連歌の、第三句にせば、さかるべきなり。上手の連歌、二句ならべてかきたらんに、たがはぬもあり。てもじをすゑぬにもあれど、おほくはこれにあるなり。さりとて、木の下風はさむからでときゝて、かはをわかちめられけん人のやうに、ひたぶるにいふべきにはあらず。塩がまの浦ふく風に霧はれて、みよしの山の秋風さよふけて、などよめるたくひをそおきていふなり。おほくは、たけ高からんと、はかる心よりおこるなりといへり。家隆卿の、「をとめ子が葛城山を春かけてかすめどいまだみねの白雪。」頓阿の「故郷となるまでひとのなほすみて荻ふくかぜに衣うつ聲。」良阿の、「みどり子のまたふをだにもふりすてゝ心たけくも世をのがれぬる。」救濟の「ともしびのあかき色なる鬼をみておやにかはるや姿なるらん。」善阿の、「あし引の山にふす猪のよるは來てかへしたる田をまたかへすなり」など、後世の連歌は、概てもじをすゑたりと思はる。北村季吟は、あけぬともなほ秋風の云々は、やさしき歌にやと云へり。甚だまた「秋かへすさや田にたてるいな草のねでとにも身をうらみつるかな」を、秋かへすとよめるは、いかなることぞば

ぞや。さや田といふは、いかなる田をいふにか。なかにも、もみとよめるたねのことか。いまだ、もみとよめるうた、きこえず。まさなくこそ侍れといひ。「庭もせにさきすさびたるつきくさの花にすがれるつゆのしら玉」を、さきすさびたるこそ、いみじうげにおぼえ侍れ。萬葉集などには、侍りもやすらん。すがれる露も、いとをしうも見え侍らずといひ。「けさみれど萩をみなへしなびかしてやさしの野邊のかせのけしきや」を、萩をみなへしなひかしてといふ文字つゞき、やさしの野邊などまで、いと見どころなく侍るめり。誹諧の躰の、ことをゆかぬにこそはんべめれども、上句すこぶるちからもなきやうなりとも、難ぜられたり。

顯昭法橋は、「松風のおとだに秋はさびしきにころをうつなり玉川のさと」を、玉川には、必ころもをうつべきにあらねど、やさしき所の名を、ひきよせたるなり。又、件の里に、松あるべしともきこえずといへるを、松永逍遙軒も、此註は殊勝なり。此の以後は、松をよむ證歌となるなり。當世の人、俊頼のまねして、其の名所に例なきものを、詠むべからずといへり。法橋また、花下述懐の、「さくら花ちりかふほどはなみかけてあらふてじまのひさきとは見る」を、述懐の心なしと難せしを、逍遙軒は、此哥の小島は、花の名所にあらず、いづくにてもあれ、たゞ小さ島なり。又、此の歌に述懐の心なしと不審せらる。是は、萬葉の濱楸の歌の外に、なりひら、櫻はなちりかひくものおいらくのこんと云ふ、昭宣公四十賀の御時、よみ

たまへるを、本歌としてよまるゝによりて、述懐のこゝろは慥に侍り。又、萬葉の歌も、濱ひさし濱ひさぎ兩説あるを、爰には、ひさきを取りもちひらるゝ俊頼の御作意、おそろしくこそ侍れ。此櫻、咲き散るといへど、誰もてはやして見る人もなく、餘所より、はまにある楸を、なみかけてあらふよと見らるゝは、櫻の心にしては、述懐の甚しきにあらずや。櫻にそへて、我身もひさぎのごとくに、人に見るべきとなり。あきなひ人を、ひさぎといふによせたり。此ひさぎ、一首の眼なり。と卿の作意しさへ敬服せり。法橋また、「をくろきはたのねはなはふみしたき日も夕ましに蛙なくなり」を、夕ましは、暮を下人は、ゆふましといふなり。くたりましなどいふ詞のこゝろかと

ひ　ゆ　か

嘲り。「にごりなきみのもに月のやどらずばいかであさぢのかずをしらまし」を、あさぢは魚の名なり。鰯とかけり。鮠といふ魚の、おいて色のあかみたるをいふとも、下人申すかといへり。今も讃岐地方にて、はえの赤く大なるを、あかまつといふとかや。また「秋かりしむろのをしねを思ひ出ではるそたなゐにたねもかしける」を、むろのをしねといふこと不審なり。むろは、早稲なり。然らば、むろのはやわ田とも、むろのはやわせともよみ、又、おくてのひたにおどろきてむろのかり田にしきたつなどこそよみたれ。しかるを、をしねは晩稲なり。むろのをしねといけんこといかゞ。若、紀伊國のむろ郡のをしねとよめるかと疑難せられたるを逍遙軒は、むろのをしねとよめる所、作者

ニ　ユ　こ

の粉骨なり。其の故は、わせのたねをひたすひろへ、去年とりちがへて、晩稲をまきし故、當年あやまらじといふことをいはんとて、思ひ出でとはよめるなり。さにてこそ、おもしろけれ。秋かりしむろのわさ田をおもひ出でとよめは。有ることにて、何の詮あるべからすと辨ぜるは。一わたり面白き考なるべし。されど、藤井高尚橘守部などが、をしねは小稲なり。をはたゞ美賞言にて、小笹小簿など云ふ類のをならん、といへるぞ正しかるべき。

大器晩成といふことを

横井知萬多

國になくてはかなはぬ、人にも世にも仰がるゝ斗りの人は、必らず初めより然るにはあらで、多くの月日をつみ、年たけてのち、なりたるものにぞあなる、幼きをりには、神のやうにもてはやされし人も、やう／＼に大方の人なみになりゆくは、古より少なからぬ例なるぞかし。こはわかき折に、年にくらべては才すぐれたりと、自らも思ひ、人にもしかいはるゝにつけて、おのれと思ひ上り、學ぶべきわざをも學ばず、さゝやかなる事にかゝつらひて、さかしらのみとり行ふによりてなりけり。後世までもはやさるゝばかりの事しをへむとする人は、よく學び、よく考へて、おろそかには、手も足も出すことなし、其はやがて天をも地をもつきゝはむるばかりのこと、せむと思へるこそなりけれ。一日競馬といふもの見にものしけるに、

いと遠き處を三たびめぐるなりけり。はじめは赤き冠物したるがいといさましく、次に青、つぎに白、其次は黄、又その次は黒なり。二たびめには、青白いやさきに立ち、つぎに赤、其次は黒黄なり。三たびめには、白眞先にいと勇ましく策わけ、つぎは黒にて、後にはいと遙かに青赤黄とあらそふめり。今はみな人の目は白に入りて、やゝともかり打はやすに、いよ／＼勢たちて、自らも聲などかけつゝ進む内に、黒はつひにならび立ちぬ。今は定めの處も近くなりけれど、いかに／＼と打騒ぐに、いかにしけむ、白はたと眞逆樣におちぬ、又とびのらむとするまに、黒は早く勝のしるしとて旗たかくさゝげ、皆人のうつ手の音かしましき中に、勝関のやうに、馬も高く嘶きわたりぬ。

あはれ黒、はじめはいと終りにこそゐたりけれ。つぎにもいやさきにはたゝざりき。終りのきはになりてこそ、はじめて功あらはしけれ。又とおる處に運動會ありしをり、競走といふことしたるにも、さることありけり。あはれはかなきわざにつけても猶かゝり。めざましき事なさむとするには、必らずはじめよりさるにはあらで、よくつゝしみ、いつまでも撓まぬ志よりおこるものなり。いかでかわかきをりよりさゝやかなる事にかゝづらふ人などのなし得る事ならむ。いかでか當世才子などいふきはのしることならむ。國に世界に尊とまれ仰がるゝもかゝる事は。

蕎麥の花

森の舍主人

高崎正風大人が、昨年九月、秋時雨といふ題にて、「秋ふりてそはふ花ちる朝かぜに時雨そめけり山のへのさと」、いふ歌を詠出給ひけるに、其後、石川貞直といふ人、書を送りて、そは花のちらぬものにて、菊の如くしをれつきて、實を收る時に打落し候ものに御座候、云々とありけるを、大人いとゞ、感賞して、みづから此歌の實地にそむきたるを恥て、赤面とまでの給ひしは、まことにおやまちを改るにやぶさかならざる君子の心とは申し侍るべき。この事、女鑑の六十二號にくはしく見えたるを見て、拙き心にふとおもひよれる事の侍るを、打出んもつゝましく、さりとていはざらむも腹ふくるゝわざなれど、いさゝか申し侍らん。

抑、古今集に「うゑしうゑは秋なき時やさかざらむ花こそちらめ根さへかれめや」といふ歌あるを見るべし。貞直の書に、蕎麥は花のちらぬ物にて、菊の花のごとく云々といへる、其菊にしてちるといへり、古き抄物に菊は花ちることなし、たゞし、すべて、花はちる物なれば、ろよづの花におはせてちるといふ也。又、白樂天の詩に、黃菊花濃風散砌と云り、是は菊の散を作れり、正しくちらねども、常の花になぞらへていふなりとあるが如く、たゞ大らかに、そばにもあれ、菊にもあれ、花なれどちるといはんに、さのみとがむべき事かは。ことに、秋の末、ひや〳〵と朝かぜのそよふくに、そばの花のおどろへたるが、枝

ながらうできなどする、遠くのぞめど、誠にちるやうにも見え侍りなん、それをちるといひては、實景よそむきぬ、實地にかなはずとあながちにいはんは、中々かたくるしとや申し侍らん。草木のうへのみにかぎらず、山川の景色をよめる歌にも、此たぐひ多かりぬべし、たとへバ、古今集なる、「谷風にとくる氷のひま毎に打出る浪や春の初花」といふ歌なども、大いに實景にそむきたるものなり、貞直の如き田舎人は、われ山ちかくすみて去れり、春もやゝあたゝかになり、谷川の氷かつかつとけわたる時分には、水はたゞおだやかに流れ下るのみ、いかでか、氷のひま〳〵より波の打出ることあらん、さるを、波の打いづといへるのみならず、花に見たてたるは、實景を去らぬによれるなり、すべて波の花といふものは、海邊ならバ風あらき日、谷川ならば巖などにふれて、波のたつ時にこそ咲べけれ、氷のひまより浪の打いづべきにあらぬがうへに、まして、其波の花とみゆべきやうあらむやは、などいひもしてん、理窟もていへバさることなれども、歌のうへにはさま〳〵なる見たてい、ひなしありて、これらも、氷とけては浪も打出べき物とし、其浪は、又花と見ゆる物とかりに定めて、かくよみなしたるが、一首の趣向にて此たぐひ後世甚多かれど、實地にかなはずと強てとがむべきにはあらずかし。但し、かくは申すものゝ、これらの歌は、古今集のころに始り、それより後の集に多く見る所にして、上代にはある事なし。實に、萬葉集などには、正風君の、た

まへる、實地實情より來るところの咨嗟詠歎のこと葉のみにして、誠に鬼神をも感ぜしむべき歌は、そのころに多く、古今集以下にはやうやく少く、近代に至りては、ますます稀なるをなげきて、高崎大人が、口をひらき筆を執る毎に、實地を離るな、實情にそむかざれと、教へ給ふにぞ有べき。

道のしをり歌合（十二）

久志本常幸寄贈

降るまゝに靡きふしつゝなよ竹の
　なかなか雪のをるべくもなし

吹き亂す風のおとよりやがてまた
　こゝろとくるあをやきの糸

とかく女は、のどやかにして物にさからはぬぞめでたき。こちたく理につのるべからず、いかなる事も、すぎにしあとは、遺恨をとゞめざるぞよき。

心にもあらでやまねくはなすゝき
　あきの野風にそゝのかされて

しぐるれどよそにのみ聞秋の色を
　松にかけたるつたのもみぢ葉

わが本意にもあらで、心よりはさに引まどはされあるは、用心のなほざりなるより、おもひの外のぬれぎぬをきせられ、あだしうき名のたつことのあるぞかし。つねに遠く慮をめぐらして、つゝしみをおこたるべからず。

秋の野の萩のうは葉にかせすぎて
　こぼれにけりな萩のしたつゆ

浪こさぬ浦のひかたの衣なかせに
　こゝろとたちてなく千鳥かな
心さだかならず、みれんなるものは、さらぬ事にもあわてておどろきて、見ぐるしくとりみだすことぞおほかめる。揚雄が閣より投じけるたぐひ是なり。徘諧の句に「わが事と泥鰌のにげる根芹かな」もろこし人の「打草驚蛇」といへるごとき、まことに笑ふべし。足にきずだになくた、など實地をふみしめて立ざるや。とかく人は平生の覺悟、正しくたしかなるべきなり。
燒かずとて草はもえなん春日野を
　たゞ春の日にまかせたらなん
吉野川よしやとものをおもはずは
　ながれて世よも有れだにせじ

事をこのめるつとめぶり、さし出たるせわやきだて、かならずしもせずともあらなん。なべてうき世の事は、あながちに泥み惱みなんは、みづから身を苦しめておちきなし。
はとゝぎす人も言葉もおほかるは
　衣なすくなしとひと聲やなく
久しきは花にもひとはわくぞとて
　こゝろはやくも散るさくら哉
多言のつゝしみ、長座のいましめ、君子は人の歡を盡さずのむねにあん。「おもふどちまどゐせる夜はからにしきたゝまくをしきものにぞ有ける」とよめるは、いかにもさることながら、ろれはたまさかの事なるべし。兼好がつれづれ草にいへらく、「さしたる事なくて、人のがりゆ

くはよからぬことなり、用ありて行たるとも、其事はてなバとく歸るべし、久しくゐたるいとむづかし。人とむかひたれバ、言葉おほく身もくたびれ、心も靜ならず、萬の事さはりて、時をうつすたがひのため益なし。おなじ心にうちむかはまほしく思はん人の、つれ／＼にて今しバしけふは心靜になどいはんは、このかぎりにはあらざるべし。」と、よくいましめさとしたり。

殘りなくちるぞめでたきさくら花
　ありて世の中はてのうければ

山かげに住ぬこゝろはいかなれや
　をしまれて入る月もある世に

仕官の道にながゐをふりて、役にたゝずなりよ役所をふさげ、賢路をさまたげ　急流勇退する

ことわたはざるもの、是を誦じて愧死すべきなり。されど、義をも廉恥をもしらざらん輩は、蚊子鐵牛を咬むごとけんのみ。

足曳のやまのもみぢ葉ちりにけり
　あらしの先にみてましものを

植ゑざりし今ひともとも悔しきは
　はなさくころのにはの秋はぎ

諺にも、善はいそげといふなるに、心に勇なく、義を見てせざるはくちをし。たとひ智仁の徳ある人といへども、優游にしてきれ刃にぶく、果敢決斷の才なければ、事の用にたゝず、義をあやまることぞおほかめれ。殊に、もの丶脩行はわかき時につとむべきものなるを、おこたりがちに年月をすぐして、いたづらに老て悔むぞ

あぢきなき。俳諧の句に、「けふになりて菊つくらふと思ひけり、」ことパはいやしけれども、切なるいましめになむ。

昨日こそ早苗とりしがいつのまに
　いな葉そよぎてあき風のふく

何時の間に紅葉しぬらん山ざくら
　きのふか花のちるををしみし

年なみの流れてはやき、またゝく間にすぎもてゆきて、きのふはけふのむかしとぞなる。さるをうか〱と等閑にくらしなバ、うろたへまどふ事のみぞおほからめ。つゞりさせてふきりぎりす啼で、おこたれる婦いそがはしといふことわざも、これらのためのいましめなるべし。

月日のみなす事なくてあけくれむ
　くやしかるべき身の行方かな

天の戸をあくる日毎になにごとを
　なすとはなしの身のみふり行

庶民それ〴〵の業をつとめて、いづれかいとなみに勞せざるものやはある、まかるに、士大夫たるもの、ゐながら君の祿をついやして、つひよさせるつとめもなく、何事をあすともなしにあそびくらして、光陰のをしむべきを思はず、あさましく吾身の道にうとく、たゞに行尸走肉にて世を終らんは、物躰なしといふもおろかなりや。

かひなしや今日はきのふの善惡を
　思ひわけてもあらためぬ身は

いたづらに過ごしかたを思ふまに

昨日やけふとまたやくらさん

みづからわが非を知るといへども、まけをしみの心さたなくて、過をあらたむるにはゞかり、いたづらに過こしむかしを悔ながら、なほ心ざし立ずして、とやかくと歳月をくらしはつるたぐひ、みな氣に勇なきゆゑぞかし。かゝるいふかひなきともがらは、まさかの事あらむきはにも、かならず手むさくおくびやうなるものと知らる。さればまけをしみのひがみは、さふらひのうへには、殊に恥べきことなり。

明日ありとおもふ心にはかられて
　けふもむなしく暮しぬるかな
明日よりはあだに月日を過さじと
　おもひながらもまた暮しつゝ

今日學ばずして、來日ありといふことなかれ、「來年は來年はとて暮にけり、」あに悲しからずや。

昨日といひけふと暮してあすか川
　ながれてはやき月日なりけり
あづさゆみ春たちしより年月の
　射るがごとくに思はゆるかな

ひまゆく駒のとゞめがたき、寸陰ををしまざらめや。

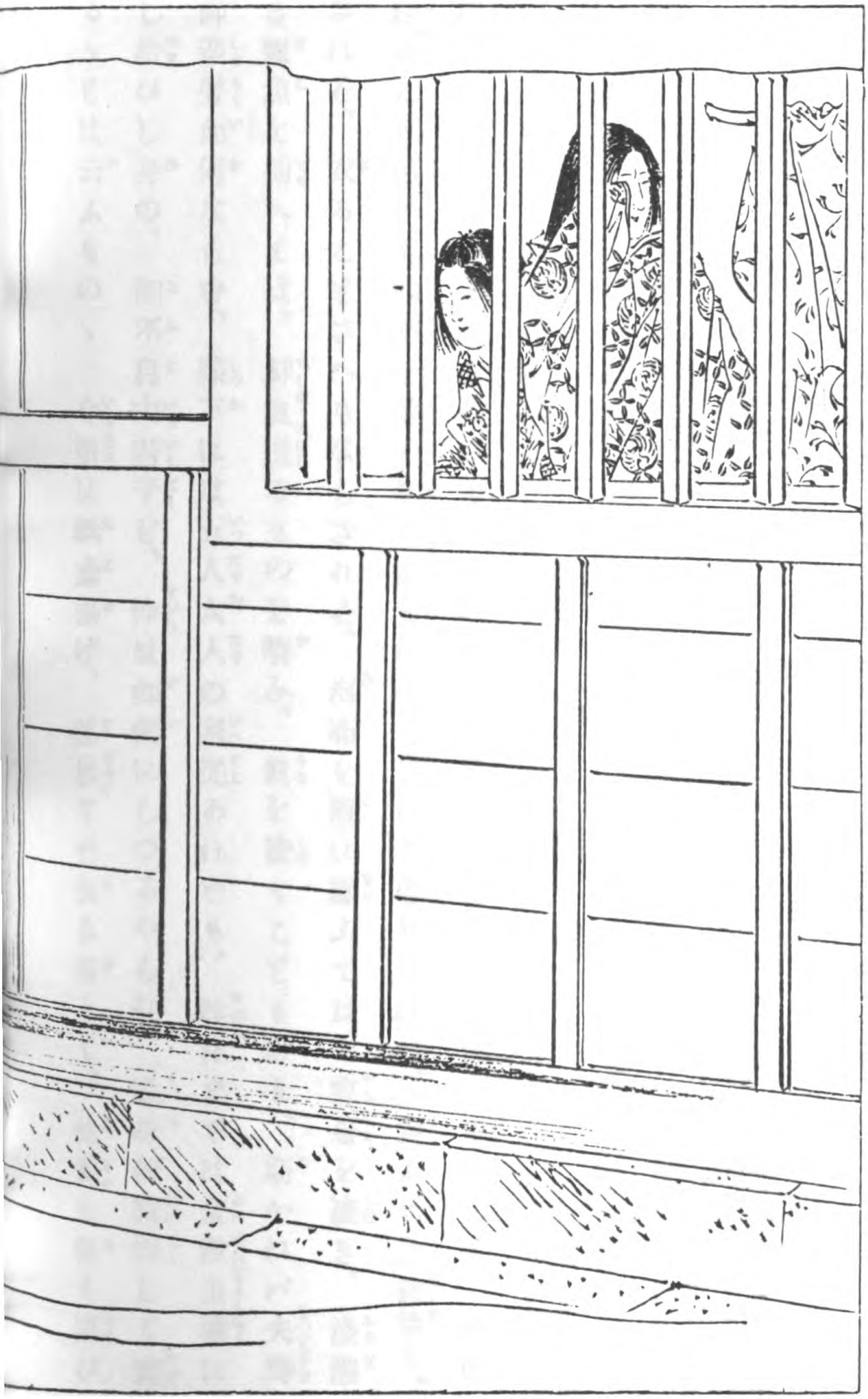
徒らにけふもくれぬといひ／＼て
　あはれ我世もさてくれぬべし
今日もまたゆうべになりぬ幾年の
　すぎんもさぞなあはれ世の中

忠孝二筋道

渡部乙羽

其五

花は根にかへり、紅葉は幾回か色を移して、また三つ四つの星霜を重ねぬ。月を積み、年を經るにつけて、想ひ出さるゝものは、別れし人の消息なり、浮田の內室は獨り都に殘されて、比翼連理を語らひたる、夫は、千萬里の波濤を隔てゝ、波白く松青き處に居給ふと聞くのみにて、御起臥の有樣だに得知らぬ果敢なさ、人傳に聞く八丈嶋は、鬼とも擬ふ嶋人のみ多く住みて、氣風荒々しく、風俗野卑にして、禽獸と相距ること遠からぬ男子等の居る處とかや、されど獵せざれば、食ふべき肉無く、織らざれど、衣ることさへもならざれど、海布を腰に纏ふては、寒暑を凌ぎ、淺瀬に躍る雜魚を捕へては、鮮血迸るものを咽み、飢を凌ぐこともあり、斯かれば夫秀家の御辛勞如何ならむ、膝下には五人六人の家從あれども、昨日までは金殿玉樓に起臥し給ひし身の、御不自由若干ぞ、悴は如何にしつるやらむ、乳母が精悍しく育て呉るゝとは云ふものゝ、今頃は紙鳶揚げ、毬杖など曳き摺りて、他愛も無く遊び





戯るべきに、不愍や、牧童漁夫に交りて、聞き馴れぬ島言葉の訛を噛み分け、終には歪が子と齊しく、色も黒み、辭も鄙び、生ひ抜きの島人に化せなんか、妾翼だにわらせ、彼島へ飛んでも行きたき思ひすれど、女の身の意氣地無さ、殊には國法わりて、自儘に渡海もならず、如何せバ、夫や子に逢はるべき、日頃頼みし神佛も妾が上を照らし給はぬか、怨めしや天道と、果ては世を怨み人をも恨みて、涙に袖を濡らし給へり。

まことや浮田家の内室は、その身百萬石の家に生れ、歡樂の雲にのみ裹まれ給ひし御方の、如何人の行末の水の流れに齊しとは云へ、斯くまでに味氣なく世を送り給ふこと、その不幸比すべき方もわらざるべし、それ姫君とし云へど、歌舞管絃に春の日の長きを知り給バず、花には三十一文字の意氣をつらねて、お中老の點に笑みを傾け、戀歌の題に當惑しては、源氏狹衣に風雅を探り給ふ、或は珠簾深き處に香を焚き籠めて、落葉を書院に伴ひあるは、蘭燈の下に文さし延べて、見ぬ世の人の粹なるを慕ひ給ふ、月の宴には琴に想ひを述べ、重陽の日には菊を手折りて、慈童の昔時を欲ふめり。他人の家に嫁しては、腰元女中に傅かれ、小松を東郊に曳き、

秋實を西野に拾ふ、母となり、姑となりては、いよ〳〵浮世に遠く、物の哀れは露ほども知り給はぬものなるを、これはそれとは異りて、百の苦勞に面窶れし給ひ、憂ひに沈む有樣は垣にからむ牽牛花の照日を厭ふ如くなり。

御臺所が斯くも嘆きに沈み給ふ樣子を見るにつけ、稚心にも痛み參らせて、折節はそを慰め奉るは、乳母が殘せし一子なり、今茲は十二の春を迎へて、髮黑く眉秀で、頬豐かに肉肥え、天晴可憐の少年となりぬ。衣裝は御臺所が心をつけて、時の流行を着せ給へば、模樣美くしき振袖に、堅縞の袴をつけたり。今しも秋風清き縁の下に咲き匂ふ白萩を眺め居けるが、俄に涙をむら〳〵と流して。あア我も永く御臺樣の御側に居ること叶はぬか、子として母の遠嶋せられしを、袖手して傍觀なるべきか、許されぬまでも訴へ出でゝ、是非に彼嶋に渡るべし、若しそれにても御許可の出ぬ時は、小舟なりとも竊み出して、闇夜に紛れ渡海なさむ、さりながら我れ海邊に人と爲らねば、舟を行る術を知らず、櫂を操る道も覺えぬ、此儘こゝに斯くして在らんには、御臺所の恩愛に覊され、名もなく朽んこと必定なり、御別れ申上ぐるは名殘多けれど、心を決めて御暇を願はむ　今日離別を悲しむとも、何日か袖を分

たねばならぬ、離合時あり、別れても恙無くぞ、また逢ふ事の出來得べきは、春の花の散りて來る年を待つに齊しと、決心めて御臺所の側近く進み寄り、椽端の閾に手を支ふれば、彼方は短冊の筆を下に措きて、何ぞ用事かと物和かに問ひ給ふ、此方は畏る〲平服して。御臺様折入つて御願が御座りまする、唐突に斯く申しては、御疑ひあるべけれど、これは拙者の先年より思ひ立つたる儀に御座れど、一通り御聞下されたし、そも〲御主君秀家公八丈島に流され給ひし以來、十歳あまりに相成れど、未だ御音信も無く、その御存亡だに定かならず、拙者の母も彼地に隨從し參りたれど、それさへ安否を聞くこととならず、雨につけ風につけ、戀ひしう御座ります、慕はしう存じます、就いては拙者彼島に押渡り、御主君の御安否を見屆け、御臺所の御心を安め奉りたし、それにはこの姿にては叶ひ難く存ずる、今日よりして出家得道し、麻の衣に檜木笠、廻國行脚の僧に扮して、渡海を公に願ひなば、世捨人の名にめんじて、御許可のあらんも知れず、これ迄の御高恩は決して忘却いたしませぬ、枉て暇を賜はりたしと、嚴と搆へて云ひ出せば、御臺所は泣き伏し給ひ、物をも云はず手をとりて、涙に黒白も判らざりけり。

花菖蒲

其六

千稻子

昨日迄は、樂しきも共に笑ひ、苦しきも共に語り、慰み勞はられて日を送りし母に別れ、力と頼む知章は、又海山隔てたる戰塲に馬を驅り、我れ獨り殘されて、恰も親鳥の羽搔を離れし雛鳥の如く、晝夜思ひに沈みてのみ暮せしが、漸く心を定めて都に出で、姿を代へて仇靑山か邸に忍び、折よく便宜を得たりしを、情なや忽ち縲絏の身となりはて、五月闇に迷ふ郭公の、血に鳴く聲を絞りて、涙落ちくること雨の如し。

菖蒲は、かよわき白き腕を脊に括り上げられ、七重八重に纏はれし荒繩に肉を嚙まれて骨痛み體痺れ、闇き一間に閉ぢ籠められて、日毎夜毎、こし方行先を忍びつゝ、悄然として無念の涙に咽ふ。

四邊は板戸に圍れて、一縷の風の滑り來る道なく、勢鋭き炎熱は屋根を燒きて、蒸し殺さるゝかと思ふばかりに、全身を絞りてしゝどに流るゝ汗は涙と共に膝に滴り、

亂れに亂るゝ黑髪は蒼ざめたる顏を包みて、時に震ひ時に波打つ、其顏は僅の間に甚く窶れて、淸らなる頰に殘りたる一抹二抹薄紅の色いつしか褪め、白玉に一顆の黑漆をうつしたる凉しき眼も、絶えざる悲痛の霧を宿していとゞ曇りぬ。或時は悵然として顏を擧げ、苦しき息を漏らして長嘯すれバ、白露落ちて音を爲し。或時は首を垂れ沈思して昔を思へど、悲哀胸に滿ちて身も震ひぬ。菖蒲は死んと欲したる事も多かりき、舌を嚙み切つて無念にもゆる惡血を靑山が面上に吹きつけ、心よく死なんと欲したりき。されども、一刀なりとも彼の憎き靑山が皮肉を貫き、血汐滴る刄を眺めて莞爾笑ひ、かくて後に死なんと思ふなり。又一つの願ひは、夫知章に一目なりとも相見ゑ、一言なりとも相語り、此世の暇乞を述べて瞑目したしと思ふなり。此二つの事は、悲哀に沈み無念に湧く菖蒲は胸中を常に行き通ひて、少しも離れず。誠に此二つの事は、今日迄菖蒲が玉の緒を繼ぎ止むる糸なりき。思ふも哀れ聞くも哀れ。

かゝる折しも、彼方より簀子を踏む足音夥しく聞ゑて、やがて戞然として杉戸荒らかに押開け、奸佞の顏を表はしたるものあり。菖蒲は垂れたる顏を擡げて屹と見返

れど、頰面膨らしたる青侍三人、兩の手に拳を固めて肩を怒らし、毛虫を横へたるが如き眉を閃々と動かしつゝ、噛みつくが如き皺聲にて、四人立てといふ。扨は愈愈死ぬべき期は來りにけりと思へど、爭ふも詮なく悲しむとて已に返らぬ事なり、若し醜き最期を遂げて敵に咲はれ人より、潔く死に就くに如ざるべしと思ひ決め、今は中々に悲嘆も殘りなく消ゑ、僅かの恐怖も起らず。漸く引るゝ儘に痺れたる足を踏み固め、板敷幾多を過ぎて、庭の木立のあわいを潜れり。

空をも隱すべき木立は綠葉の艶美はしく翻へり、炎ゆるが如き日の光も隙なく隔てられて、風動く度にかげを長く地に印せり。此綠葉を渡り來て靜に面を撫でる涼風は、心地得も云はれず、菖蒲は顏を上げて長息す。彼れは殆ど二十日ばかり其身に日の光を浴びず、又袖をかへす涼風に逢はず、今や摧かれんとする露の身を忘れ、失落に沈みたる身の凡てをも忘れて、思はず佇立めど、忽ち後に勵聲叱咤の一聲、歩め、歩め、四人めといふ迅雷の響に、又悲痛に責めらるゝ元の身に返りて、憎き鬼共がと思ひつゝ、萎々として其處を過ぐれど、やがて坐れといふに、腰をかゞめて土の上に蹲踞り、少しく顏を擡げて前を見れば、口元に冷笑の皺を寄せて、嘲るが

如き流眄を我が顔に滑らし、傲然として坐りたる青山綱範、流石心を決したる菖蒲も、又湧き返る無念の涙を留るによしなく、身を震はして、食ひしむる歯に、音きしりて折れんとすなり。

此樣を見たる青山は邊り搖ぐ計りの高笑を落し、こりや菖蒲とやら、無念でわらうな、飛んで火に入る夏の虫とは其方の事ぢや。蟷螂の痩斧の提げたるにも劣る分際に、我を狙ふとは氣や狂ひたりと見える。笑止や氣の狂ふたる鈍眼には、此青山を平家に仕ふる内人とのみ考へつらん。ハヽヽヽヽ、あたら菖蒲のゆかりの色香も、晝を待たで枯れて行く旅路の土産に、我本性を云ふて聞せる、修羅の廰に罷り出たらも忘れずして申述べよ。

かくいひて一膝進み出し、羽翼の如く肱を左右に張りて、再び邪惡溢るゝ目遣ひを、萎れたる菖蒲が頭に流し。そも我身は、剛惡極まる清盛か爲めに、履頭の打擲を受けたる西光の兄弟ぞ。ハヽヽ、驚きつらん。かく今日迄、小虫一匹知らざりし本性の表を拭へバ、誠に平家は我が仇敵なり。されバ旨々と癡愚鈍能なる宗盛が心中に分け入り、我が三寸に足らぬ掌中に彼が六尺の體を丸め込み、何れは消え行く平家

の運を早めんものと思ふ折から、能に誇る弟の知盛めは、小賢しくも我が胸中を透し見て、我れを六波羅より追ひ拂はんとするに、己れ憎き振舞する者かな。いざさらむと手を盡して宗盛を欺き、兄弟の間を二ッに裂き、尚乳臭き身ながら用ある事に手を出す知章めも、無き者にせんと巧くんだる謀は、無念にも横に外れ、其余滴が其方の身に飛びたるのぢや。殺さずとも死ぬべき老婆の身を、今更悔むは冥途の妨ぞ。知盛も知章も早や長くはあらぬ生命なれバ、先きに此世をまかりたち、三途の川邊に舟を艤して待つて居よ。こりや忘るゝな、其時我が胸中の策を彼等にも云ふて聞かせよ。

いひつゝ膝を叩いて大笑せり。庭の木の葉の簸られて揉み合ふまでに笑へり。

彼れか胸中に蟠みたる奸策の秘密をバ初めて聞きたる菖蒲は如何でたまらん。柳眉を逆立てゝ亂れたる黒髮を婆娑と一振りし、瞑したる兩眼を開きて睥睨すれむ、青電迸り飛びて青山が邪惡の胸を射拔かんとす。

やがて、振り絞る聲をあげて、巳れ逆賊め、身は死に血はあゆとも我か惡靈は、汝が身に纒ひ、祟り祟りて汝等親子を狂死せしめんづといひつゝ、總身を震はして思はず

口を啣みしむれバ、紅梅を染め抜きたるが如き優しき唇は、忽ち破れて、紫の濃血滾々として流る。暫くして炎ゆる焰の如き息をはつと吹き出せは、紅の狭霧四邊にたちて朦々たり。

文林

市中梅雨　　近衛 忠熙

市ちゆく人てそたえねさみだれの
　晴まにもなほわめよそひして

毛利 元徳

さみだれの日をふる頃は打日さす
　みやこの市もさびしかりけり

東久世通禧

白金の名におふいちのやなぎかけ
　くらくしげりてさみだれの降る

鍋島 直大

賑はしき市のちまたもをり／＼は
　ゆく人たえてさみだれのふる

高崎 正風

打日さすみやこの市もおほかたは
　とざしこめたりさみだれの頃

諏訪 忠元

待郭公

人傳をまちわびつゝもほとゝぎす
　おくやまふかくたどり來に鳬

市中梅雨　　宮地　巖夫

晴まにとつどひし市のあきびとの
　また立さわぎさみだれぞふる

坂　正臣

梅雨のはれままちえてあさいちに
　つどへる人のおほくあるかな

植松　有經

さみだれの雨降くらすこのごろも
　しげきは人のゆきゝなりけり

小出　粲

梅雨の日かずふるまにたけにけり
　うれあまりたる市のうりなへ

谷　勤

朝市はいまかたつらんさみだれの
　雨にもどよむこゑのきこゆる

内藤　存守

おくりくるふねしなければ梅雨に
　魚うるいちぞさびしかりける

早苗　　西川　須賀雄

君が代はすむかひありとあり明の
　月にいそぎてさなへとるなり

梅雨晴　　糸山　貞幹

さみだれの雨晴ぬらしかたつぶり
　はふや軒端にいり日さすなり

鵜川　　師岡　正胤

かゞり火のかげほの暗きさし蔭を
　みをかくれしてのぼる鮎かな

毎朝聞時鳥　　石丸　忠胤

朝趾のいづるみそらをまちとりて
拜む日おちず鳴くほとゝぎす

田舍に歸る人をおくりて郭公歸と
いふことを　三浦　千春

限りあれバ今は歸るにしかじとや
なきて入さのやまほとゝぎす

お今長兵衛　佐々　豊水

はらからが心づくしはいまいちの
今に名だかしくものはたてに

菖蒲　草野　隆道

住の江の菖蒲さかりになりにけり
なには少女らいまやひくらん

市中梅雨　鍋島　榮子

さみだれの降くらす日も立さわぐ
市びとのこゑかしましさかな　柳原　愛子

さみだれの雨にゆきゝを絶せぬは
みやこの市のちまたなりけり　小池　道子

梅雨のあめをやみなくふるまゝに
かさ賣る家ぞいそがしげなる　松平　健子

ゆき通ひしげき市路のひとこゑも
まれに聞えてさみだれのふる　鶴　久子

市にたつ人のとよみもさみだれの
ふりしづめたる此ごろのそら　諏訪　晴子

山家卯花

たきゝこる賤が垣根に卯の花の
ゆふべ露そふいろのゆかしさ

夏山　小川　昌子

夏ころもすゞしくも有るか谷蔭に
み雪のこれるこしのしらやま

新竹　尾崎すゞ子

何事もおとりゆく世にならはぬは
ことしの竹のかげにぞ有ける

師岡須賀子

古のふみ見る夜半にいとゞしく
かをりもするか軒のたちばな

源義家　海上　壽子

色香ある君がこと葉のはなゆゑに
關路のさくら世にぞ知らるゝ

深山路に時鳥のはるかに鳴きけるを　河野　文子

行かひもたえし深山のほとゝぎす
誰にしのぶの音をやなくらん

女鑑をよみていさゝかもふ心を

年廼舍主人

さいつ頃、さる家にゆきたるに、女鑑といふ書ありければ、何心なくとりてみるに、論說、史談、學園、敎の庭と、部門を分かちて、いづれも若き女子のをしへの爲にものしたるなりけり。ことに、三輪田眞佐子刀自の、こまやかに女子の心用ゐをのべられたる、はた、史談に、いにしへよりの貞女烈婦の傳をかゝげられたる、いづれも名言美談に

して、今樣のいと輕々しき風にかたむけるにはあらで、いとめでたき書なりけり。文學の開けたる世とて、女子のよまん料にものせし雜誌の類、數多くあれど、みな、一方に傾きてわかぬを、かくばかり完全したるものは、少かるべし。さて、史談の條をつくづくと見もてゆくに、其の行ひのうるはしくめでたき、たゞ涙にむせぶの外なかりけり。思ふに、人は、いといかめしき詞を以て、其の道をときさとしたらんよりも、まのあたりありける善行のさまをかたりいでんかた、感情の深きものなり。まして、年わかき少女にありては、さもあるべきことなりかし。されど、史談の條こそ、此の書みん少女子の心を深く感ぜしむるものなるべけれ。かの、父兄の身の上を思ひて其の身をすてたる夜叉御前の如き、或は、かよわき身をもかへりみず、おのが心をくるしめて、遂に其の父の仇を復したる宮女信女の如き、はた、我夫の上を思ひ、後其の操を正うしたる大姫の如き、各其のつくしたる所はかはれども、其の本とするは誠心にあり、げに鹽井ぬしのいはれしごとく、我國の女子は、こちたき法の道をふみ分け給ふにも及ばじ、又ことさへぐからの學、日の入る西の國の學をも務めたまはでもありなん。只此の誠心の一つだにあらば、おのづから父母に孝を致し、夫には貞を盡くすに至るべし。おのれ、この書をみるにつけて、かくおもひいづるまゝに、難波のあしのみだりがはしきことをもかへりみず、かくはものしつくるになん。

附云、此の書の世の少女子のために益あることとは、いふも今さらめきたり。さて、前にもいへりしが、史談こそ、此の書の中の眼目ともすべきものなれバ、世の古今を問はず、貞女賢婦の行を、樛の木のいやつぎ〳〵にものせられんことを願ふになん。且、此の書にのせたる物語を見れば、今の世のいたづらに亂りがはしき文などにかはりて、忠孝に富みたる人の上をものせられたる作者の心こそいとゆかしけれ。

夏の夜友を訪ふ

横井知萬多

ある月いとおもしろき夜、いたづらに過さむことの口をしさに、心しりたる人のもとに、尋ねゆきてみれど、其庭にむしろたつものなきて、たゞひとり空をのみながめゐたりしか、おのれのいたるをみて、ゆくりなき事よといたくよろこび、月もよし折もよしなどいひつゝ、酒など調じて出しければ、二人さしむかひて、杯など取かはすほどに、友のいへるやう、某のおもとが夏は夜、といひけむはまことなりけり、そは今宵のやうに、月のいとあかきは更なり、雲井に鳴わたる時鳥、川邊に飛びちがふ螢など、あるか中にもいとあかぬものにこそ、四の時をり〳〵につけて よき見物もあれど、夜の空は、夏にまさるるものなむなきなどいふに、おのれいへるやう、されど春の夜の朧なるけしき、秋の月の隈なき影などには、など

てかまさるべきなど、二人論ふひまに、垣邊にさける橘のかけに、時鳥の啼わたり、川邊にそひて、螢のあるかなきかに飛くるなど、えもいはずをかしきに、まづ口さしふたがれ、耳ふりたて、目そばたてられてなむ、

雑報

●去月二十八日は、皇后宮の御誕辰にて、地久節とも稱へ奉るべき、萬民の共に賀ぎ奉るべき祝日なり。殊に女子の最とも祝ひ奉るべき日なれば、諸姫も、皆、諸共に、大御代の八千代萬代を祈り奉り給ひしなるべし。

●憐れ　悲慘の極ともいふべきは、徳島縣三好郡三名村の三百有餘の同胞にこそあれ、此の村は、固より三面山を繞らして、いと不便を極めたる土地なるに、昨年は、旱にて、七十餘日も雨なき爲に、甘藷麥等の農作物は、春も秋ともに少しの收穫ながりしかば、其の困難を來したるは、實に一方ならず、今は、全村ともに餓えて死なんとするの慘狀に迫りたりとぞ。この明治の大御代にして、かゝる悲しき憐れなる、ことの出て來つるは、誠に如何なることよかありけん。耳にこの有様を聞くもの、目に其の慘狀を見るもの、誰か哀憐の心

を起さゞらん。誰かは慈善の念を生ぜざらん。ああ、食すべき穀物は盡きたり、草根も木皮も亦盡きなん、財産ありし家も、亦、食を得ずして草根を食ふに至り、三百三十余人の老若男女は、生たる顔色なく、目も當てられぬ姿となり、遂には病を生じて死するもありといふ。これにひき換へて、朝夕の不自由だに露ばかりもなき諸孃は、この慘狀を聞きて、如何に思ひ給ふべきか。同じく御國に生れながら、如何なる故にか、斯かる不幸には遭ひたるぞ、あはれ諸孃其の身の用を愼しみて、餘りあらば同胞を憐み給へ、徒に衣の好惡をのみ爭ひ、身の飾にのみ心すべきことかは。彼の餓に泣く人々に鑑みて、いかでか心のまゝの事をか爲し得らるべき。

●孝女貞婦の賞賜を受くるもの　此の頃、各地に多かりしは、誠に喜ぶべき事なりけり。先月中に各地方廳より金圓を下賜せられしは、左にあぐる人人なりき。

備前國兒島郡甲浦村
小田加津

資性淳良幼にして父を喪ひ母亦癈疾の不幸に遭遇し家計貧困の中にありて孝養懈らず適々些少の金錢を得るも藥餌滋味の料に具へ日夜病蓐に侍して看護を竭し剩へ家業に精勵し又克く妹を愛撫す人入婿を勸むるも孝養を缺かんことを患ひて之に從はず其孝順悌愛玆に廿五年志操一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金七圓下賜す

同國同郡同村
小田麻起

資性温厚幼にして父を喪ひ母亦癈疾の不幸に値

遇し家計貧窮の中にありて姉の困苦を輔け孝養
懈たらず曾て他家の雇女となり得る所の給金は
悉皆姉に送致し母の藥餌滋味の料に供へ其主家
に事ふる精勤忠實茲に二十五年志操一日の如し
洵に奇特とす仍て其賞として金三圓下賜す

土佐國土佐郡宇治村
池澤銀次妻
粂

資性温柔平生克く舅に事へ其久しく病に臥する
や夫を扶けて日夜定省怠らず飲食必ず其嗜好な
撰び看護能く其意に從ひ只管病苦を慰藉するこ
とを勉め二十餘年の久しき終始渝らざる段洵に
奇特とす仍て其賞として金一圓下賜す

埼玉縣武藏國男衾郡本
畠村飯野甚五郎養嗣女
と　り

資性温良克く養父兄に事へ明治十二年中養父劇
節病に罹り手足不隨と爲り尋て養兄亦同症を患
ひ一家操業者なく益々貧困に陷るも幼弱の身を
以て父兄の看護に當り傍ら賃役を事とし或は紡
績の業を營み漸く長ずるに及びて農作機業を勵
み奉養倍々努む其志操を變せざること茲に十數
年洵に奇特とす仍て其賞として金一圓五十錢下
賜す

高知縣高知市廿代町
中野楠次妻
濱　田　其

姑瘋癲症に罹り十餘年の久しきに亘り狂譟常な
きも能く看護して危險に陷らしめず隣保親戚皆
鎖錮するの已むべからざるを説くも獨り拒みて
之に應せず益々奉養を厚くする段洵に奇特とす
仍て其賞として金一圓下賜す

神奈川縣相模國大住郡
秦野町川口由太郎妻
は　ま

資性純良舅姑に奉じて至孝夫に事へて貞順夫負

債の爲め踪跡を失ふに當り僅少の産舉て辨償の資に充て窮困に陷ると雖も毫も屈撓せず自から耕耘に從事し舅の病に罹るや看護療養懈らず舅沒し姑も又尋て老疾を發するに及び奉養倍力め傍ら子女を撫育し孀婦の身を以て克く一家を保持すること茲に數年洵に奇特とす仍て爲其賞金一圓五十錢を下賜す

佐賀縣杵島郡錦江村
亡貞助寡婦
中村さゑ

夫貞助重病に罹り家計日に窮迫を告ぐるに際し尫弱の身を以て晝は傭稼に務め夜は紡織を事とし以て家政を維持し傍ら病夫を護る邇幼兒を撫する慈以て夫死亡の後も能く遺跡を保ち貞操を變せざること多年一日の如し洵に奇特とす仍て其賞として金二圓下賜す

●例の年廼舍の五月例會の歌にて、婦人の分のみをわぐれて、

五月兼題

橋邊藤

橋のへに春よりなつをかけてさく　ふちのしなひをひたす池みづ　増山三雪子

紫のひらはりうちしてゝちして　ながはしづたひかゝる藤なみ　南部明子

むらさきの雲を渡せることゝちせり　かゝれるはしのふぢなみの花　南部喜久子

かわきしの松にかゝれる藤かつら　こやはし姫のかざしなるらん　大岡操子

岩はしの苔ふみわけてみてゆかん　たにまにかゝる藤のさかりを　増山喜美子

池の面にかけ渡したる丸はしの　上にもなびくふぢなみのはな　溝口久爾子

朝な夕なゆきかふ志ばのかけ橋に　南部　麻子
かゝりてさけるふぢなみの花

谷川のくちたるはしにふぢなみの　南部　銈子
かゝりてさくかなつかしき哉

苔むせる谷の志ばゝしなつかけて　酒井　鐵子
うへなきいろのふぢさきに鳧

岩かねの松にかゝりてたにかはの　大河内かず子
はしにそわたるふぢなみの花

志ばはしの志たをながるゝ谷川の　渡邊須磨子
そこにもにほふふぢなみの花

かけはしのうへよりみれば山川の　鶴　久子
あさせにうつるふぢなみの花

山人もゆきゝまれなる谷川の　秋野美佐子
橋にまつはるふぢなみのはな

ゆく水の音もそはりてたにがはの　河合喜佐子
丸木のはしにかゝるふぢなみ

時わかぬときはのはしに春ふかき　樋口　桑子
いろをかけたるふぢなみの花

さく藤の花のかたみにかけすてゝ　織田須磨子
春はくめぢのはしやこゆらむ

ひらさきにみづのわやおる藤浪の　尾崎　靜子
花こそかゝれたにのかけはし

山吹のはなはながれてゆくはるを　小坂多餘子
はしべのふぢは今さかりなり

いと長く松のうれよりふぢかつら　深見　愛子
さきかゝりたるきそのかけ橋

藤波のかたなるはしのこけきよみ　後藤可禰子
水そこにほふはるのやまかな

色かへぬ松にかゝりてふぢのはな　勝田　鮮子
さきなびきけり岩ぎしの上に

くちのこる谷の板はしみづこえて　飯田以禰子
風にみだるゝふぢなみのはな

わたりなははなやちるらむ藤波の
さきのさかりははしなくも哉　藤井　靜子

さきにほふさかりもながき藤波の
花こそかゝれまへのたなはし　益子伊都子

道たえしみやまの谷のいしばしよ
色めづらしくかゝるふぢなみ　宮田　道子

ゆく春もしばしはこゝに止むらん
藤のしからむたにのかけはし　樋口百合子

谷川のはしのたもとにまつはりて
色かもふかくにほふふぢなみ　宮木滿勢子

藤の花さきそめしよりむらさきの
波たちわたるいけのやつはし　佐方多滿子

夏かけてさけるさかりはたけ川の
橋べもわかすかゝるふぢなみ　諏訪　晴子

谷川のみづもかれにししばはしを
いかでこえけんふぢなみの花　皇年廼舍主人

兼題

六月廿日
歌……………鵜川
文……………家庭育兒の論

七月五日
歌……………夕顔
文……………避暑の案内に答ふる文

教の庭

六月五日兼題　里早苗

（天地人の外は原稿到着順なり）

天　高知市西弘小路　野尻鶴子

里つゞき田子の小笠の見ゆるなり
　いまや早苗を植ゑわたすらむ

地　熊本縣菊池郡城北村　澤田春子

をやみなくふる五月雨に競ひつゝ
　里のをとめもさなへとるなり

人　愛媛縣新居郡大町村　藥師寺芳子

降る雨をよのめぐみぞとさと人の
　そでもほし敢ず早苗とるなり

昨日けふ時來にけりとしづの女が
　さとにわまたの早苗とるなり　石井德子

降りつゞく雨もいとはで少女子は
　いそぎて早苗うゑわたすなり　片岡光子

賤の女がうたふもろ聲きこゆなり
　とはたのさなへ今かとるらむ　内田慶子

遅れじと田子のも裾もひるまなく
　よどの里わのさなへとるらむ　内田雪子

早苗とる千町の小田のやまざとに
　うたふ田歌のこゑぞきこゆる　平野きみ子

置きわたす露もうるはし里の子が
　うゝるやまだのとみくさの苗　佐々有鄰子

何時のまにのび立にけん早苗とる
　さどの少女のこゑぞにぎはふ　德永萬壽子

五月雨になべてふしみのさと人も
　おきゐてのみや早苗とるらん　千々波橋子

諸聲にをとめがうたふなへうたに
　やま田の里はけふもにぎはし　神田きん子

賤の女がいそぐとすれど小山田の
　さとのたま苗うへはてぬなり　神田榮子

朝ごとにめざまし草とおもふまで
　かどたにつゝぐつゆのたま苗　溝口秀子

朝まだきわめはれはてゝ里の子が
　さなへとる手に露ぞこぼるゝ　溝口惠子

時きぬとさとの少女がかきわけて
　そでもほしえず早苗とるなり　溝口信子

打わたす一むらざとのをちこちに
　みゆるは田子の早苗とるなり　菅谷こう子

賤の女がふしおも白くうたひつゝ
　たけ田の里にさなへとるなり　諏訪晴子

里人のうゝるかど田のさなへにも
　としある秋ぞかねて知らるゝ　大橋てい子

早苗とる田子らが唄ふつれうたに
　かたやまざとも賑はひにけり　佐々木詠子

こん秋を語りあひつゝ小やま田に
　早苗とるなりさとのたみくさ　佐々木謙子

雨はれてけふは田毎にしづのめが
　さなへとるなりやまもとの里　羽田三緒子

打むれて里のをとめがとるなへに
　けふに町田をうゑつくすらん　羽田たか子

五月雨の晴間もまたでしづの女が
　みのわの里にさなへとるなり　河野文子

みどりなす里の早苗は日のもとの
　あをひとくさのたからなりけり　竹内美枝子

豊かなる御代のめぐみに里の子が
　さなへとる田の賑はしきかな　青木春子

雨はれしけさの朝けにしづの女が
　かど田のさなへ今やとるらん　笠原よし子

山里にけふもさなへをいそぐなり
　しづのをとめの袖ぬらしつゝ　小原さと子

早苗とる賤のをとめのこゝろにも
　うゑおくれじと急がれぬらん　熊谷あや子

雨はれて賤がをとめは今日こそと
　あさまだきより早苗とるなり　淵井富子

打むれて賤がをとめのさなへとる
　かど田の面のにぎはしきかな　大槻かをる

人なみに植ゑおくれじと早苗とる　萩原八千代
しづの少女のいそがしきかな

植ゑわたす里のさなへの色にても　川瀬しげ子
ゆたけき御代の秋ぞしらるゝ

時きぬと早苗とりつゝむらざとは　川瀬さく子
たてのもろこゑ賑はひにけり

若苗をとる手ひまなくさとびとは　壬生　清子
ま袖ぬらしてけふもくらせり

やま里は淋しきものとおもひしを　上野　兼子
早苗とる子ぞけふもつどへる

早苗とるとはのさとびと今よりは　高井　米子
ゆたけき秋をいのりまつらん

五月雨のはれま待ちえて賤の女が　吉田　芳子
さなへとるなりさらしなの里

豊かなる千代の初はのわきまちて　吉田たけ子
つるのさと人さなへとるなり

五月雨のはれまもまたで賤の女が　伊藤　操
さとわの小田に早苗とるなり

袖ぬらすうさもいとはでくる秋の　横敷たか子
たりほうれしく早苗とるらん

世の中の人のいのちをしづの女が　坂口しん子
てにまかせつゝとる早苗かな

見る限りみどりのほかの色もなし　橘　雪江
さとわの早苗けふもうゝれど

大御代のめぐみの雨のふるなかに　坂口すゑ子
さなへとるなりやまざとの民

若なへのつゆの玉ゆらどる手にも　土山八重子
ひまなく見ゆる里の千まち田

押なべてみどりなりけりやま里の　花山やすゑ
さなへに露のいろもそひつゝ

昨日よりふしおもしろく歌ふなり　花山きのと
いさわの里にさなへとりつゝ

ほとゝぎす來鳴く頃しも今はとて　植木　鋼子
岡べのさとにさなへとるあり

まだきよりけふも山田におり立て　永井るい子
早苗とるなりゐでのさとびと

植へそむる里の早苗のとり〳〵に　馬島久仁子
しづが田歌もおもしろきかな

賤の女がふしおもしろく唄ひつゝ　馬島たま子
さとの早苗をうゑ初めにけり

畔道に小がはのみづのにごれるは　佐藤敬子
あなたの里にさなへとるらし

里の田にたのしき歌のきこゆるは　西澤あや子
さなへをとれる賤のこゑ〳〵

幼きも老いもつどひていそがしく　大橋ひろえ
さとの小野田の早苗とるなり

早苗とる里の田おもをながむれバ　草加さだ子
むれなる鳥のすがたなりけり

昨日まで見るものもなき里の田に　大橋兼子
みづせき入れて早苗とるなり

いとまなき田子や心のいそがれん　工藤りよ子
里のさなへはのびまさりつゝ

賤の女がとりし里田のわかなへは　工藤あさ子
なべてみどりになりにける哉

をちこちに笠かたふけて少女子が　尾崎なほ子
ふしおもしろく早苗とるなり

蛙なく小田のさなへやとるならん　花輪玉子
うたふ田歌のをちにきこゆる

昨日今日いと賑はしくなりにけり　河野雪子
かたやま里もさなへとるらん

姿こそ小がさのなかに見えねども　尾崎憲子
うたふ田歌はかくれざりけり

くるゝまで玉なす汗にうちぬれて　小林竹子
老いも若きもさなへとるなり

長き日をみじかく送るさとびとは　河野竹子
いかにたのしく早苗とるらん

早苗をバうえつけながら里の子が　江馬信子
ふしおもしろくうたふ聲かな

安らけき御世をうれしきやま里に　丹羽志津子
おいも若きもさなへとるなり

里人はみなおくれじとゆふべまで　阿南圭子
かど田のおもに早苗とるなり

こん秋をたのみにかけて賤の男は　八太光子
稲葉のさとにさなへとるなり

早苗とる竹田のさとにしづの女が　高橋政子
ふし面しろく植ゑはやすらん

賤の女が千代のはつ苗とりわけて　高橋千代子
里田の小田にうゑそめにけり
早苗とる千よろづ里のますが男は　山田　先子
なべてゆたけき秋をまつらむ
賤が女が早苗とるらしさらしなの　勝家かをる
たごと／＼にうたのきこゆる

六月五日兼題
あらまほしき事

天　長野縣長野町　吉田　芳子

幼きときより孝悌の道に志したる和き順ひて物靜かなる人と交るに情ふかくて心やはらきたる已れの懿をたふかく包みかくしたるなどは女子の身の常にあらまほしき事になむ

なり形と丶のひて立るふるまひなどの正しく萬つつまやかに飾少く言葉遣ひのさわがしからざることもまたあらまほし貴き家に生れあまたの人など召使ふ身にてぬひたちを始とし煮燒料理の事にいたるまで一わたりは覺え知りたらむこそまことにあらまほしかるべけれ

地　熊本縣菊池郡北村　佐々有鄰子

ひらけにひらけゆく御代にしあれどあらまほしと思ふもの種々なるを枕の草紙にはあらねどかぞへあぐれバ西洋ふりのかどかどしきをすて丶皇國ふり天竺のもの丶ふりも漢學あぶら蕭よりも大和繪象よりは牛馬は御國鳥鷄も犬もかの國めきたるよりもわがもの弓矢は袋にをさまる御代なれど大砲小銃をこそ其他はわが短をすて丶かれが長をとらまほしましして女こち／＼しきいでらすがたをすて女郎花の日本心あらまほしうあん

吉田たけ子

紅梅のとく咲きいでたる博士のうちつ丶きて男子生ませたる花がめに折々の花さしはさみたる乳子のよろこぶ道具取揃へたることはあらまほしき事になむ　又少女子の薄化粧してあさやかなる衣着たるよきたきもののたきて客人まちたるなどはい

とも〳〵あらまはしき事になむ

つれ〳〵とひとり閉ぢこもりたる嵐の夕雨のあしたなど隔てなき友垣のきて世の中の物語りこの頃ある事のをかしきもにくきも怪しきも是はかゝり彼はかゝりなど公私おぼつかなからす聞きよき程に語り出でたるなどはあらまはしき事の中にもあらまはしき事になむ

坂口志ん子

酒飲みてあらひさる田舍より初めて都に出でたるかいそおちつきたるやんことなき人の前にて女子の言葉少き姉妹睦くて互に手どり歩みたる都に物學びして歸りたる女子のたかぶらぬなんとはまことにあらまはしき事になん

わけて五月雨の晴間軒の松の露に宿れる月影の折々は風にゆられてきら〳〵するが久しくかゝりて散らぬなんとはあらまはしき事の限りにてや

うさくなる
ひさを
なにさて
恨むらん
しられす
しらぬ
なりも
ありしに

（新古今集）

餘芳

みちのつと（つゞき）

小池道子

廿九日、てけよし。けふは、大みつかれもやましますらんと、みかうしも心してけるに、大みけしきうるはしうて、例の時に、ひるのおましにいでさせたまひて、みけきこしめす。さま〳〵のみものがたりせさせたまへるを、うけたまはるに、安らかに明かし暮らしつる身をおもへば、いと〳〵かしこし。三時すぐるころより、いとまたまはりぬ。さるは、わたくしのたびならねど、おもひのとめにたれど、よになき跡とぶらはでやまむは、はいなきことにおもひて、うち〳〵に、ねぎこゝろみつるに、かたじけなくも、ゆるさせたまへるなりけり。こけのしたまで、みめぐみの露もらし侍らむとて、まづ、道のたよりよけれど、丸山なる徳川左衛門佐殿のみはかにと心ざす。此の君十六になりたまへるとし、御せうとの君の上洛にしたがひて、のぼりたまひけるに、御いとまたまはりたまひけるをり、此の君を、内のみまもりにと、長者町の邸にとゞめさせたまひけり。ひとゝなり、かしこくおはして、文

武のみちに、ふかく。心をもちひたまひ、故殿のみこゝろざしをつがせたまひ、よろづに、末たのもしう、みえたまひしを、あへなくならせたまひしをりのかなしさ、今更におもひ出でられてなむ。いまはこなりたまへる時、なからむ後も、心は、みやこにとゞまりて、守り奉らむを、ちかき山べにはふりてよと、のたまひのこしたまへるによりて、長樂寺のうへなる山にはふりまゐらしゝなり。一えだの花にほへて、

おほみよのはるのさかりにあはずしてをしくもちりしやまざくらかな」。坂二段ばかりおりたる所に、大塲主膳正、三輪信善、原忠成、服部正子のはかあり。みな、水手向などするも、夢の心ちす。この正子は、佐殿の生まれさせたまへるとき、侍ちまうけの長に、殿にめされて、かしつきまゐらせ、むつきのことよりはじめて、よるひるとなく、いそしみつかへまゐらせて、人となりたまへるを、たのしみつるかひなくなりたまひし後、よを、うきものにおもひはてゝ、此の山のふもとに、くさのいほりを結び、廿年餘、みはかもりのやうになりて明しくらしぬ。曉の雲の消え行くをみては、つれなくのこれる身をなげき、入相のかねの音をきゝては、わがよ

のくれをまつより外の事なしなど、をりをりの文にいひおこせたるを、おもひいづるも、いとかなし。雪あられのふる日といへど、ひと日もおこたらずまゐりて、朝消めし、花奉りなどするを、このよのたのしみとせりとき丶て、こたびぞとぶらはむとおもひけるを、をとつとしの冬、身まかりにけりと聞くに、たへがたき世をたへてけるかなと、あはれにかなしう打ちなかれしに、今、碑をみれば、みづからかきたる、筆の跡にて、歌あり。

おくれても道は一すぢ志での山こゑてふたゝびつかへまつらむ」とあるをみるにも、むねふたがる。

なくなくもなぐさめむやとおもひつる君はむかしの人となりにき」。われも、故御息所にわかれ奉りしころは、この人のやうにて、すぐさましはしど、かへすがへすおもひしを、親王の、むかしをわすれさせたまはぬあまりにや、をさなきより、さぶらひし人ぞと、分けてめされつるかたじけなさは、わが身のうへかはと、かしこけれど、ありしみかげになずらへて、つかうまつりしを、此の君も、北方にても、むかへさせたまはむ後ならましかど、すこしは、なぐさむやうもあるべかりつるにど、

更に、かへらぬことをさへぞおもふ。けふは、ひがし山のわたり、はじめてなれば、よくみむとおもひたりしを、こし方をのみおもひつゞけて　何ごともおぼえず。かの草のいほりは、われなりと、人のいふに、立ち寄りてみまほしけれど、大徳寺にとおもへど、心せかれて、よそにみつゝゆく。五時ごろに、龍光院なる有栖川宮の御はかにいたりぬ。後西院帝の女御のみはか、御代々々のみこたちのみはかを、ふしをがみてかへりぬ。光照院の尼君の、まめやかに、あまたゝびとぶらひつるに、よそにすぎむは、ほいなければ、とぶらひまひらせたるに、門もさしてあり。明けさせて入りぬれば、よくとはれたりとて、よろこびたまふことかぎりなし。心ばかりのあるじせむと、かねていひおきつるを、など、あないせざりしぞと、供なるをうなをせめ給ふに、今まで参りはべらざりしなど、いらへ聞ゆるもをかし。夕のおこなひもなしはて給ひて、さう〴〵しきほどなるべし。おくの間になど、何くれともてなし給ふ。佛殿にともなひて、いつき給へる毘沙門天の縁記、宮のおはしましつるよのことなどかたり給ふ。今夜はやどりたまへ、あすは、とくおくりまゐらせむなど、せちにのたまへど、有栖川のみやのみけしきうかゞひまつらむも、夜なら

でおもへば、まかでつ。みこは、二條の河端なる常磐樓のやどりにおはします程にて、物より、今かへりおはしましつるを、とくまゐれと、人々のいふに參りぬ。勾欄のもとにたゝずませたまひて、例のみけしきうるはしう、ちかうめさせ給ひて、さま〴〵のみものがたり、若宮の御ふたところ　西洋よりかへらせ給へることどものたまはする、げに、ことわりとうけたまはる。やがて、ゆふけ奉り、われもたまはりぬ。かも川のながれの音すゞしきに、をり〳〵、千鳥のなくこゑ面白し。

　ほとゝぎすなくべくなりしかも川にいまだちどりの聲ののこれる」。今すこし更けなむ、かじかのこゑもきこえむ。くれぬ先に、こゝのけしきみせまほしうおもひつるを、おそくもまゐりてけるかなと、のたまはす。おもと人も、いとまあるほどにて、心しづかに、物がたりして、九時過ぐるころ、まかりでぬ。

三十日、曇。下田學監より、みけしきうけたまはらむとて、文あり。長けれどもらす。うへの、大演習にてのおはしさま、新聞紙にをろがみてとありて、

　おほけなくみそでにつたふ春雨のしづくやよもの海にみつらむ」。また、よしのゝさくら、みめぐみの露をもまたで、若葉さしぬらむと、あたらしけれど、

みよしのゝよしのゝさくら御衣にいろをゆづりて早くちりけむ」。啓したまへなどありて、われには、

ことのはのわかどやいかにさしろはむよしのゝ川のなみならぬきみ」と、かいそへたまへり。わたくしのかへしばかりだに、きこえむとおもひど、あまりに、まどゆくよみたまへるに、こたへんかたなし。

ことのはのわかどをみれどよしの山ふみわけし身のはづかしきかな」。鶴久子よりも、たよりあり。大かたのことをかきたるのみなり。

ことのはの花のみやこの玉づさをおそしとひらくかひなかりけり」と、いひやりけれど、後に、おなじ人より。

ことのはのはなのみやこはかはらねど君しまさねばさびしかりけり」。

五月一日、ことなし。

副島伯爵校閲
東久世伯爵著　松本楓湖畫

尋常小學修身入門　全一册　一册金二錢八厘

全　教師用　全一册　一册金七錢

尋常小學修身書　全四册　每册金七錢八厘

全　教師用　全四册　每册金十二錢

高等小學修身書　全四册　每册金九錢七厘

全　教師用　全四册　每册金廿五錢

尋常小學國史談　全二册　每册金十錢

高等小學國史　全三册　每册金十九錢

中學國史　全六册

發兌所　國光社

女鑑第六十三號目次

〔明治二十四年八月八日内務省許可〕
〔明治廿五年三月十二日遞信省認可〕

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京銀座郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收書差出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領取證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

毎月貳回五日廿日發行

定價壹册金十錢
三ケ月前金五十五錢
半ケ年前金壹圓
但全國無遞送料
廣告料五號字廿三字
詰一行金二十錢

明治廿七年六月四日印刷
同　年同月五日發行

東京京橋區築地二丁目二十一番地
發行兼印刷人　川崎直衞
同
編輯人　山根勇藏
同
發行所　國光社

（印刷所　東京國光社印刷部）